

平成18年度研究報告書

児童虐待における援助目標と援助の評価に関する研究 —情緒障害児短期治療施設におけるアフターフォローと 退所後の児童の状況に関する研究—

研究代表者 滝川 一廣 (大正大学)
共同研究者 四方 燿子 (子どもの虹情報研修センター)
高田 治 (横浜いずみ学園)
谷村 雅子 (国立成育医療センター)
大熊加奈子 (国立成育医療センター)
大塚 齊 (子どもの虹情報研修センター)
田附あえか (子どもの虹情報研修センター)

社会福祉法人 横浜博萌会

子どもの虹情報研修センター

(日本虐待・思春期問題情報研修センター)

平成18年度研究報告書

児童虐待における援助目標と援助の評価に関する研究

—情緒障害児短期治療施設におけるアフターフォローと
退所後の児童の状況に関する研究—

子どもの虹情報研修センター

目 次

はじめに	1
I. 目的	1
II. 方法	2
1 調査方法	2
2 調査項目	2
III. 結果	4
1 対象	4
2 予後の社会的状態	10
3 予後の心身健康状態	22
4 施設との関係	33
5 自由記述	34
IV. 考察	38
1 回収率と信頼性	38
2 結果と考察	39
3 むすび	43
引用・参考文献	45
資料	46

はじめに

情緒障害児短期治療施設（以下、情短と表記）の児童虐待への治療的課題を整理して今後の方向性を検討することを目的とした「児童虐待に対する情緒障害児短期治療施設の有効活用に関する調査研究」（滝川他，2001）及び「児童虐待に対する情緒障害児短期治療施設の有効活用に関する縦断的研究－2000年から2004年に亘る縦断研究の報告」（滝川他，2005）の調査では、全国の情短の入所部門に2000年9月1日に在籍していた子ども全員（17施設，571名）を対象として、2000年に「入所後6ヶ月間に見られた状態像」と「調査時点での状態像」を各施設の職員が各子どもについて評定し（滝川他，2001）、それ以降2004年までその状態像とその変化を縦断的に調査した（滝川他，2005）。また被虐待児については、2000年の調査時点で入所前の児童相談所の記録等をもとに「リスクアセスメント（加藤他，2000）」に回答を依頼した。また退所した児童については退所理由や退所時の状態等の調査も行った。

I. 目的

本研究は、全国の情緒障害児短期治療施設に入所していた児童が退所後の現在どのような状態にあるのかを把握し、そこから情短のケアの有効性や施設入所児の予後、フォローアップのあり方などを検討することを目的とする。

本研究は、児童虐待に対する情短のケアの実態、その有効性と問題点の調査をもとに分析した上記の「児童虐待に対する情緒障害児短期治療施設の有効活用に関する調査研究」（滝川他，2001）及び「児童虐待に対する情緒障害児短期治療施設の有効活用に関する縦断的研究－2000年から2004年に亘る縦断研究の報告」（滝川他，2005）の調査対象をフォローアップした縦断研究である。そのため、この縦断研究において調査された対象児童の入所中の実態や治療効果と併せて本調査を検討することによって、入所中や退所時はどのような状態で、現在どのような状態にあるのかという大まかな状態像が描きだせるだろう。そこから浮かび上がる情短のケアの有効性と問題点、課題を中長期的な視点から捉え、現実的かつ具体的な指針を示すこととする。

II. 方法

1 調査方法

本研究の調査は、全国情緒障害児短期治療施設協議会の協力のもとに行われた。滝川他（2001, 2005）の縦断研究の対象となった全国17施設、571名を対象とした。各17施設に、各子どもの退所後の状態に関して、本人・家族記入用「アンケート調査」（調査A, 資料1）及び職員記入用「退園児童の状況調査」（調査B, 資料2）を2006年7月に送付した。職員記入用は施設にて回答してもらった。本人・家族記入用は各施設より各家庭に転送し、本人・家族から各施設に返答してもらった。回答されたものの内、職員記入用調査（調査B）に関しては、未返却分あるいは回答があいまいなものについて再度回答を求めた。

アンケート（調査A：本人・家族記入用）に関しては、本調査を送ることが子どもや家族の不利益になると思われる対象には、調査用紙を送付しないことを認め、その判断は各施設に委ねた。

なお、滝川他（2005）で新たに対象となった新設5施設137名は、本研究の目的が退所後の状態像の把握であるので、調査対象に含めなかった。

2 調査項目

〔1〕アンケート調査（調査A：本人・家族記入用 資料1）

性別・現在の年齢・回答者（本人・父母・その他）の他、以下の調査項目を設けた。

「元気」「居住形態」「婚姻」「最終学歴」「現在の仕事」「学校または仕事の欠席状況」「家族との関係で困ること」「生活・行動で心配なこと」「現在の治療・相談機関利用」「施設利用の満足度」の10項目と「近況や今振り返って」の自由記述を設けた。また「家族との関係」「生活・行動」項目については、問題点を具体的に把握するために自由記述欄を加えた。

調査項目の選定は、愛知県立ならわ学園（大角, 1994）、大阪市児童院（山本他, 1982）、京都市青葉寮（大塚他, 1993）の3つの情短によって独自に実施された質問紙によるアフターフォロー調査の項目を参考にし、居住形態、婚姻、仕事などの現実の状況や、学校、仕事への適応や家族との関係、アフターフォローの状況などが幅広く網羅されるよう配慮した。また本調査が、施設からの各児童・家族へのフォローアップの機会になるように、質問項目や回答選択肢の設定に配慮し、「近況や今振り返って」の自由記述欄を設け、更に、“施設では退所された方のご相談もお受けしております。何かの折にはご利用下さい”と書き添えた。

〔2〕退所児童の状況調査（調査B：職員記入用 資料2）

「元気」「居住形態」「婚姻」「最終学歴」「現在の仕事」「学校または仕事の欠席状況」「家族との関係」「生活・行動」の8項目に関しては、施設職員が児童の現在の状態を把握していない場合のために、各項目の選択肢に不明を加えた以外、「アンケート調査」（調査A：本人・家族記入用）と同一項目である。

さらに、「アンケート（調査A）の回収状況」「アフターフォローの状況」「一番新しい消息」を加えた。「アフターフォローの状況」は、「アンケート調査」の「治療・相談機関の利用」に相当する項目である。「一番新しい消息」は、質問項目に反映されない情報を収集するために設けた。

「アンケートの回収状況」は、子どもや家族の不利益になると判断したために「送付しなかったもの」や「住所不明等で戻ってきてしまったもの」「子どもや家族に届いたが回答されなかったもの」を把握するために設けた項目である。

Ⅲ. 結果

1 対象

〔1-1〕 対象とデータの特徴

先の縦断調査で対象とした571名の内、現在も入所中である対象児18名と調査AB両方の回答が得られなかった4名、2000年9月以前に退所している4名（先の縦断研究の調査から外れているため、入所中のデータが揃っていない）計26名を分析対象から除外した。その結果、545名の情短退所者が対象となった。その内訳は、男子331名、女子214名 被虐待児281名、非被虐待児264名であった。

現在の年齢は、被虐待児は平均17.6歳、12歳から24歳まで（図1-1）、退所後平均4年3ヶ月で、非被虐待児は平均19.2歳、11歳から25歳まで（図1-1）、退所後平均4年8ヶ月であった。

退所時の年齢は、被虐待児は平均13.1歳で6歳から19歳まで、非被虐待児は平均14.2歳で6歳から20歳までであった（図1-2）。

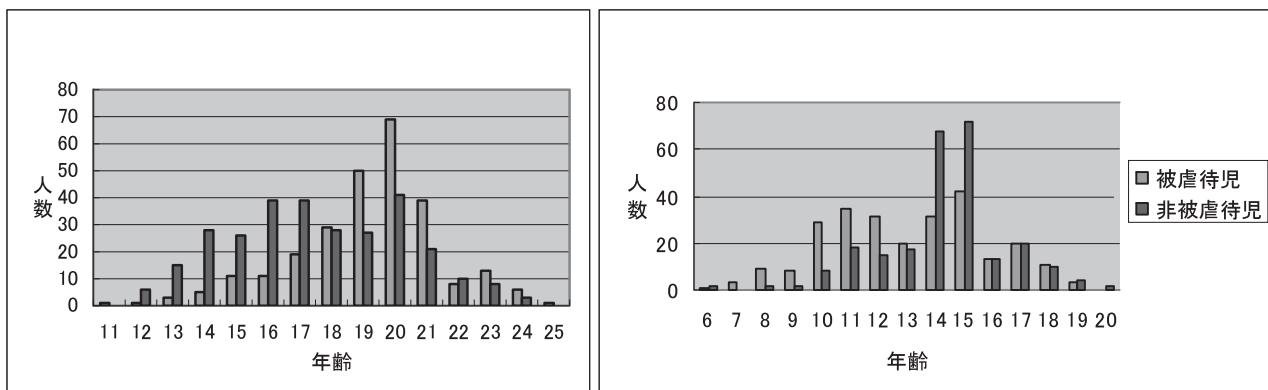


図1-1 非被虐待児と被虐待児の現在の年齢分布

図1-2 非被虐待児と被虐待児の退所時の年齢分布

被虐待児と非被虐待児の現在の年齢分布を見ると、被虐待児の方が非被虐待児に比べて、平均年齢が低く、分布も広がっている。これは、小学生の被虐待児だけを対象とする施設があることなど、各施設の特徴から分布の違いが出てきていると考えられる。また、退所時年齢も非被虐待児に比して、被虐待児の方が平均年齢が低く、6割以上が中学卒業前に退所していた。

〔1-2〕 送付と回収状況

一般的に郵送調査法では回収率の低さ（2割～3割）と代理回答の危険性、得られたデータの偏りが大きいことが指摘されている（間々田，1986）。しかし、本調査においては、回収率の低さや返却されたデータの偏りの特徴を分析することが、退所児童の状況や情短における援助のあり方、施設と退所児童の関係性を検討する上で、大きな意義があると考えられる。よって、次に回収率、回答者の属性、得られたデータがどのような特徴を有しているのかを検討する。

(1) アンケート調査（調査A：本人・家族記入用）

545名中、各施設の判断によって送付しなかったものが143名（26%）、発送したが宛先不明等により不達で戻ってきたものが78名（14%）、回答が得られたのは136名（25.0%、調査票が届いた事例中の42.0%）であった。本研究の対象を考えると、住居の不安定さ、心身の不安定さ、各施設と対象者の関係等、回収率を下げる方向に働く可能性のある複数の要因が予測されたが、予想に比して高い回収率であったと言える。

次に回収状況（返事があったもの：以下「返事」と表記・返事がなかったもの：以下「返事無し」と表記・発送したが戻ってきてしまったもの：以下「不達」と表記・発送しなかったもの：以下「不送」と表記）について、被虐待児と非被虐待児で比較したところ（図2）、被虐待児と非被虐待児は類似傾向を示したが、若干、被虐待児の方が調査票を送付しなかった割合が高く（不送率）、返事が得られた割合も低かった（回答率）。

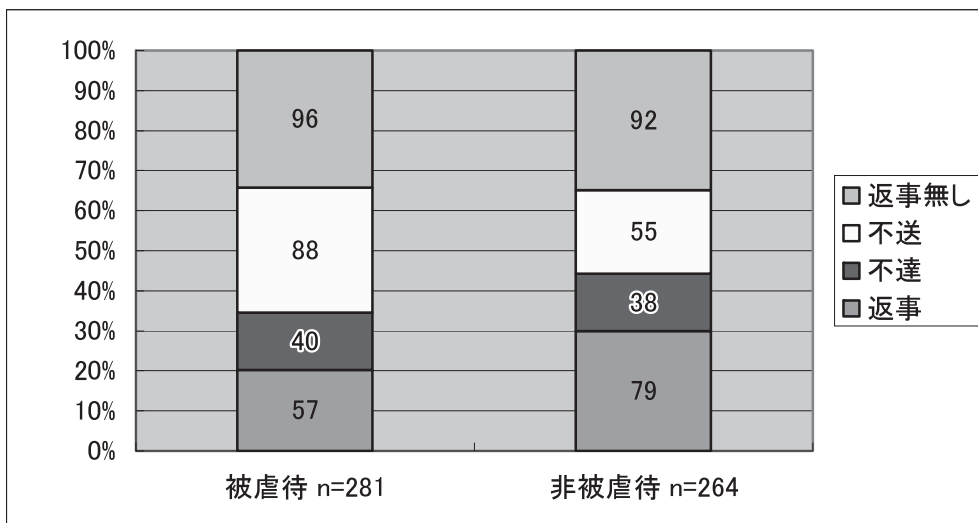


図2 虐待有無別回収状況

次に本研究で得られた調査結果がどのような特徴を持った対象から得られたものであるか検討した。縦断研究（滝川他，2005）のデータを基に退所理由が成長（358/498名）と中断（140/498名）と本調査の回収状況をクロス集計した（図3-1，3-2）。

中断事例では、成長事例に比べてやや不送が多かった（56/140名，39%）。これは中断で退所に至った事例の中には、問題行動などで措置変更になった事例、親の強引な引き取り要求によって中断になった事例などが含まれているため、各施設が本調査を送付しない方が良いと判断した割合が高くなったと考えられる。また不達の割合は、「成長・中断」ではほぼ同程度であったため、中断事例で不送の割合が増えた分、成長事例では中断事例に比して返事・返事無の割合が高くなっている。

これらから2つのことに注目する必要がある。1つは、本調査A（本人・家族記入用）で得られたデータは、非被虐待児で成長によって退所となった事例が比較的多く、そのため調査Aから導き出さ

れる結果はややポジティブに歪んでいる可能性があるという点である。もう1つは、中断事例では不送・不達で53%を占めている。これは、情短から中断によって退所した事例の半数以上が現在連絡が取れず、フォローしづらい状況になっていることを示している。このことから入所治療が中断となった事例に情短以外がどう繋がっていくのかが、その後の援助を継続していく上で重要となると言える。

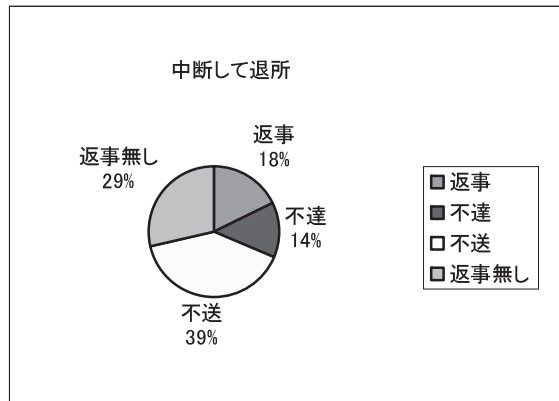
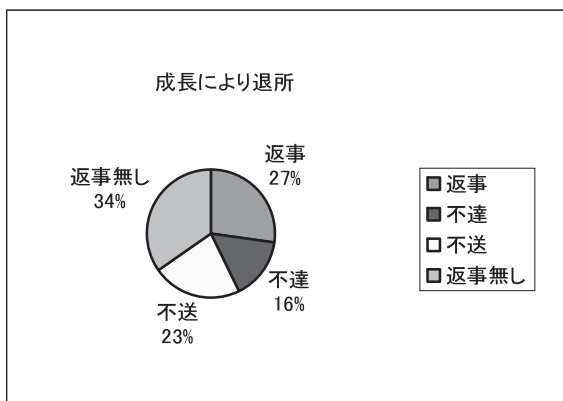


図3-1 退所理由「成長」の回収状況 (n=358)

図3-2 退所理由「中断」の回収状況 (n=140)

次に調査B（施設職員記入用）で回答されたアフターフォローの状況と調査Aの回収状況をクロス集計した（図4）。アフターフォローをしていないと回答したケースが有効回答数の76%を占めた（400/524名）。またアフターフォローをしていないと「返事無」が38%であるのに対して、当施設でアフターフォローしていると「返事無」は23%まで抑えられる。また不送・不達率を比べるとアフターフォローをしていないと不達率17%、不送率20%であるのに対して、当施設でアフターフォローしていると不達率は2%と極めて低く、不送率が47%と高かった。これは、施設でアフターフォローしていると連絡先は正しく把握している状況にあるが、児童・家族の状況を詳細に把握しているため、“送らない方が良い”と判断したものが増えたと考えられる。

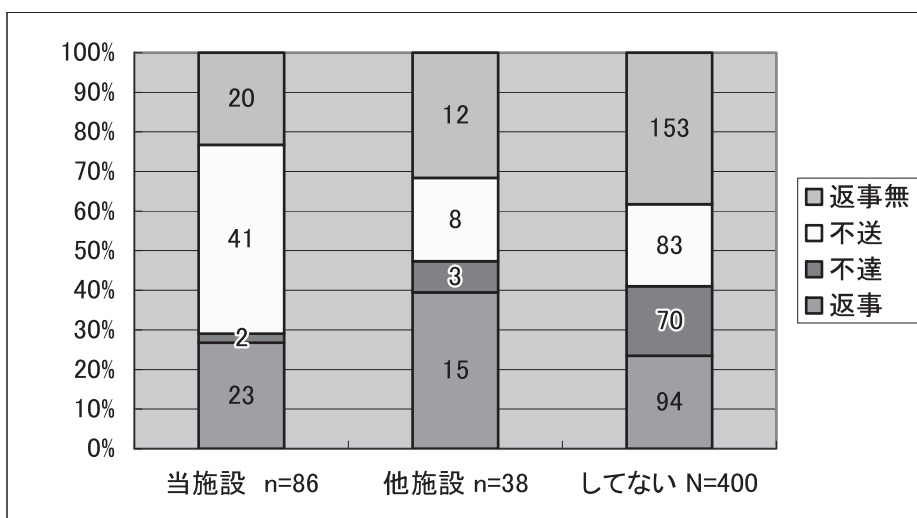


図4 アフターフォローの状況と回収状況

次に施設別の不送率・不達率・回収率を示した（図5）。回収率は、施設によるばらつきが大きい。施設の体制によって回収率はかなり高くなる可能性があり、回収率の高い施設の体制を学ぶ意義は大きいだろう。

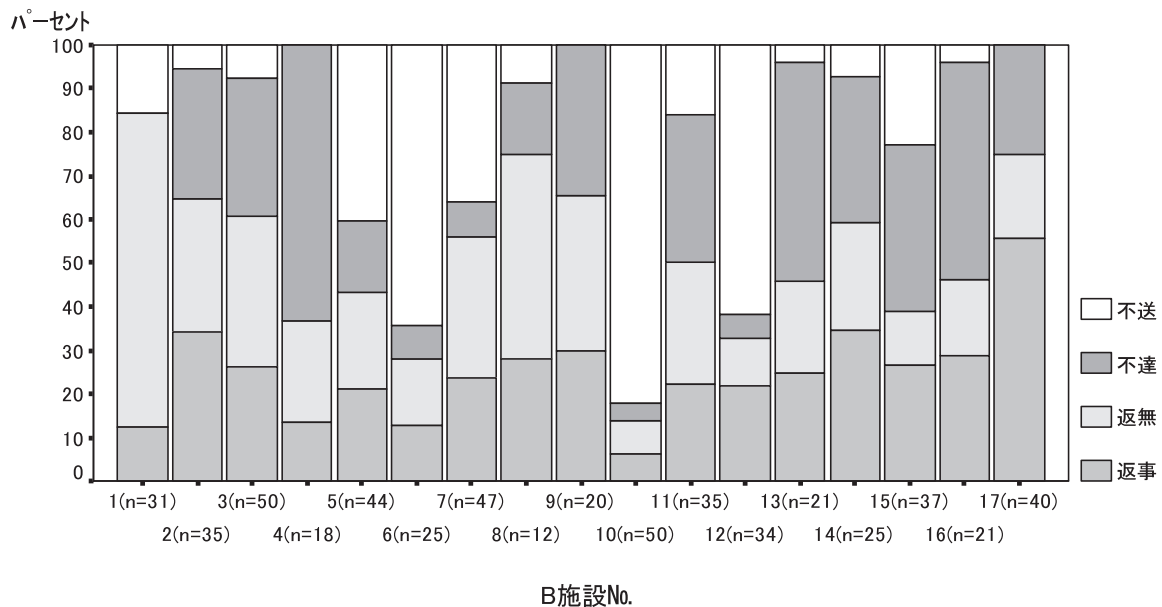


図5 施設別 回収状況 (%)

(2) 退所児童の状況調査（調査B：職員記入用）

調査Bでは、回収率99%（567／571名）であったが不明と回答されたものが多かった。不明の割合は設問によって異なるが、いずれも調査Aの不達群、不送群、返事無群の順に高かった（表1）。調査Aの不達群、即ち転居先の住所を施設が把握していなかった群では、児の消息が最も把握されておらず、調査Bにおける不明率は約5割～9割と高率であった。

表1 調査Aの送付回収状況別 調査Bの設問別不明率 (%)

	調査A				
	不送群	不達群	返事無群	返事群	計
B Q 1 元気さ不明	62.2	70.5	48.4	15.4	48.0
B Q 2 同居者不明	48.3	66.7	43.6	11.0	40.0
B Q 3 婚姻不明	42.0	55.1	36.7	11.0	54.5
B Q 4 学校不明	38.5	47.4	33.5	8.8	30.6
B Q 5 就業不明	49.0	67.9	42.6	15.4	41.1
B Q 6 出欠状態不明	76.2	73.1	59.0	27.2	57.6
B Q 7 対家族問題不明	78.3	88.5	65.4	33.1	64.0
B Q 8 生活行動問題不明	55.9	73.1	54.3	24.3	49.9

不送群では、同居者、結婚、学校、就業などの生活形態（客観的事実に基づくもの）については不明率が5割以下であったが、元気さ、出欠、家族との問題、生活行動面の問題などの現在の状態については不明が6割から8割を占めていた。他の退所生や関係諸機関から間接的に情報を得ているものと推察される。

調査票が届いたはずだが返信がなかった返事無群の不明率は、生活形態については3割から4割、現在の状態については4割から6割であった。返事群の不明率は、生活形態について1割から2割、現在の状態については2割から3割であった。

次に情報が把握できている退所児は施設との関係が良好な例が多いことが予想されるので、把握群における偏りの有無を検討するため、設問別に、退所理由及び治療効果の比率を把握群と不明群間で比較した（表2）。その結果、いずれの設問においても、退所理由は把握群の方が不明群より成長による退所の割合が若干高かったが、学校についての設問以外有意差は認められなかった。

治療効果については、いずれの設問も改善またはやや改善の比率は不明群より把握群の方が少し高かったが、元気さと学校以外は有意差が認められなかった。よって今回の調査で把握された群に大きな偏りが無いことが認められたので、解析から不明を除いて集計するが、退所児全体の傾向を概ね表していると考えられる。

表2 退所理由及び治療効果の比率の把握群・不明群間の比較

	成長による退所率(%)			治療効果が改善・やや改善率(%)		
	把握群	不明群	P	把握群	不明群	P
元気さ	73.6	70.2	n.s	87.8	81.2	0.049
同居者	72.6	71.0	n.s	85.7	82.7	n.s
婚姻	72.7	70.6	n.s	85.8	82.2	n.s
学校	75.9	65.6	0.014	87.5	79.5	0.017
就業	73.1	71.2	n.s	87.1	82.8	n.s
出欠	78.1	69.2	n.s	88.7	82.6	n.s
対家族関係	73.4	71.2	n.s	87.3	83.1	n.s
生活行動	73.0	70.9	n.s	87.2	82.0	n.s

〔1-3〕 回答者属性

調査Aの回答者の内訳を示した（図6，資料3表1-2参照）。被虐待児は本人記入が多く、非被虐待児では家族の記入が多かった。次に調査Bで得られた職員回答による児童の状態像が、調査Aにおける児童・家族からの回答とどの程度一致しているかを検討するため、調査AとBの項目ごとの回答の一致率を求めた（表3）。回答の一致しているもの（一致）、同じ回答の方向を示しているもの（類似）、違うもの（不一致）と分類して分析を行った。

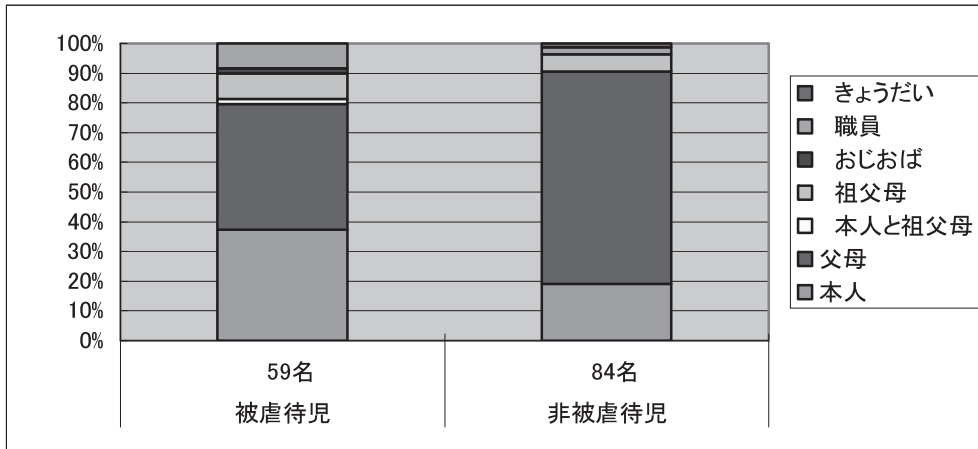


図6 調査Aの回答者

表3 調査Aと調査Bの回答の相異

質問内容	完全一致回答率 %	類似回答率 %	不一致回答率 %	一致係数
1 元気さ	80.7	19.3	0.0	0.479
2 同居者	94.4	4.0	1.6	0.905
3 婚姻	98.3	0.8	0.8	0.706
4 学校	94.7	3.2	2.1	0.926
5 就業	81.6	18.4	0.0	0.743
6 出欠	91.2	0.0	8.8	0.741
7 対家族問題	68.2	6.8	25.0	0.413
8 生活行動	65.3	9.9	24.8	0.455

一致率が高い設問は、Q2同居者、Q3結婚、Q4就学、Q5就労であった。一致率が比較的低い設問は、Q1元気、Q7家族との関係、Q8生活・行動であった。一致率が高かった設問は、どれも事実に関するもので、客観性の高い情報であり、逆に一致率の低かった設問は、困ったこと、心配なことを問う設問のため、回答者による主観的な判断が求められるものであり、妥当な結果を反映していると言える。また、家族は児の日常生活における問題を心配しているのに対して、職員は児の社会適応を心配したり、家族は児と家族のとの関係に問題がないと回答しているのに対して、職員は家族に問題ありと回答するなど、家族と職員の視点の違いが反映されていた。

〔1－4〕 調査対象についてのまとめ

アンケート調査A（本人・家族が記入）で返事が得られた事例は調査対象事例の25%、調査票が届いた事例中の42%であり、成長によって退所した非被虐待児が比較的多かった。

調査B（施設職員が記入）の不明回答の割合は設問によって異なるが、いずれも調査Aの不達群で最も高く、次に不送群、返事無群の順であった。

調査Bで、状況が把握されていた児と不明の児とは、退所理由（成長／中断）も治療効果（改善／不変・悪化）に関しても大差無かったので、不明回答を除いて集計した。

調査Aと調査Bとの回答の一致率は、客観的状況に関しては高かったが、主観的状況については低く、本人・家族と職員との視点の相違も見受けられた。学歴、就業と結婚については調査Aと調査Bの回答を統合した。

これらを踏まえ、以下情短を退所した児童の予後の状態像について、主に調査Bに基づき報告する。

2 予後の社会的状態

まず本調査で得られた退所児の現在の社会的な状態（居住形態・結婚・学歴・就労）についてまとめた。本項の目的は実態の把握とその分析である。

〔2－1〕 居住形態

本調査で得られた現在の居住形態を被虐待児・非被虐待児、男女別に表した（図7、資料3表1－4）。家族との同居が最も多く、被虐待児の4割、非被虐待児の7割に達し、次は施設入所で被虐待児の3割、非被虐待児の1割であった。男女別に見ると、被虐待児、非被虐待児のいずれも、男子の方が家族との同居も施設入所も多く、女子の方が結婚率が有意に高かった（結婚については後述する）。

さらに退所先と現在の住居形態の異同を検討するため、退所時の転居先ごとに現在の住居形態を求めた（図8）。家庭に戻った児の中、被虐待児では5割が家族と同居が続き、2割が施設に再入所となっていた。非被虐待児では8割が家族と同居が続いていた。児童養護施設に措置変更となった児は、被虐待児・非被虐待児とも2割が家庭復帰していた。児童自立支援施設に移った児は、被虐待児では半数が家族と一緒に、非被虐待児は2名とも家庭復帰していた。グループホームに移った児は、被虐待児では24%が、非被虐待児では38%が家族と同居していた。自立した児は、被虐待児・非被虐待児とも一人暮らしが4割、結婚2割、家族と同居が2割であった。

特徴としては、非被虐待に比べて被虐待家庭では同居が継続されていないこと、退所後5年以内に居住形態が変わった児が5割いるなどの居住形態の不安定さなどが見られた。

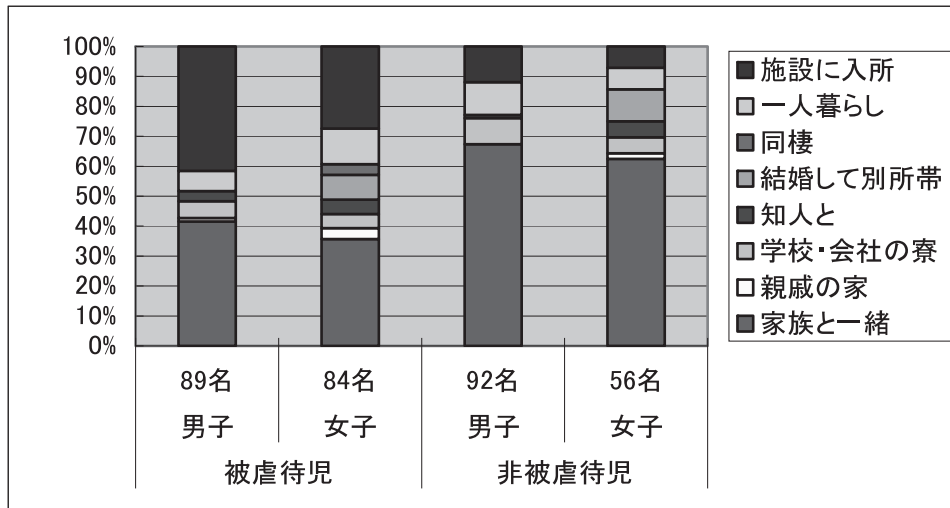


図7 虐待有無別、男女別の現在の居住形態

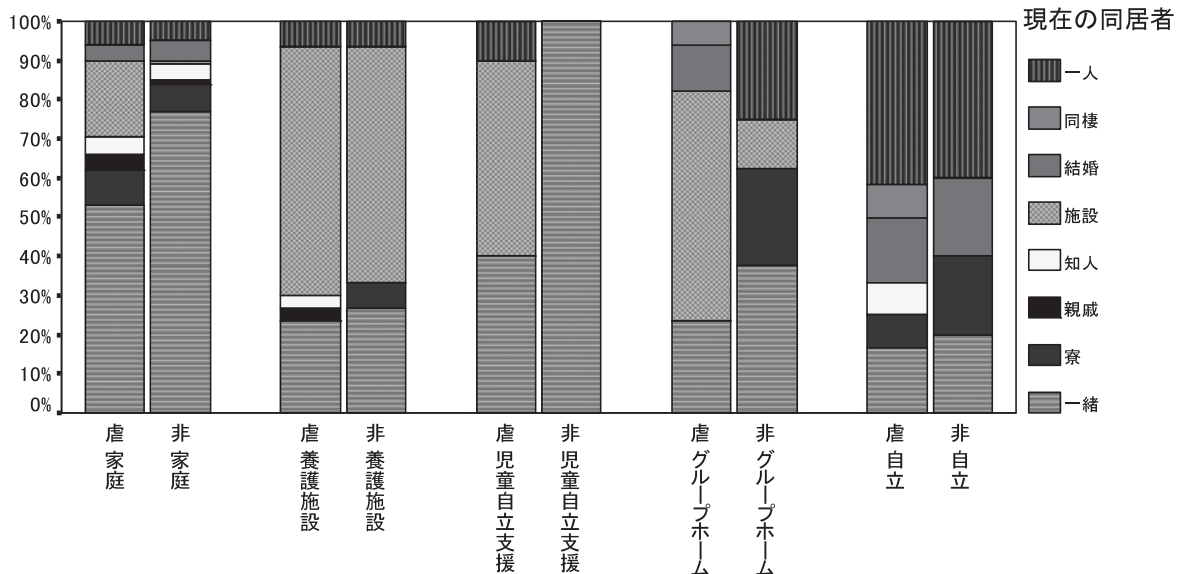


図8 退所時転帰先別、現在の居住形態

〔2-2〕結婚

結婚した退所児は17名（被虐待児9名，非被虐待児8名）、内2名が離婚を経験していた。全員女子で調査時年齢19歳～23歳で、17名中13名（被虐待児6名，非被虐待児7名）が子どもを有していた。本調査対象児中、現在18歳以上の退所児に限定して、有配偶者率、離婚者率、挙子率を求めた（表4）。年齢構成の違いを調整して一般集団と比較するため、平成12年国勢調査の性別年齢別の有配偶者率および離婚者率を用いて、本調査対象の年齢構成に合わせた年齢調整有配偶者率と年齢調整離婚者率を算出し、調査結果と比較した。18歳～25歳の女子有配偶者率14.7%は年齢調整有配偶者率5.2%に比べ

て高い傾向にあり、離別者率2.0%は年齢調整離婚者率0.3%に比べて有意に高かった。男子の有配偶者率は0で、全国と比較して低かった。

表4 年齢別既婚率と挙子率

	男子		女子	
	退園児	年齢を調整した標準値*	退園児	年齢を調整した標準値*
有配偶者率(18～25歳)	0% (0/122)	3.4%	14.7% (15/102)	5.2%
被虐待児			12.7% (7/55)	
非被虐待児			17.0% (8/47)	
離別者率 (18～25歳)	0% (0/122)	0.1%	2.0% (2/102)	0.3%
被虐待児			3.6% (2/55)	
非被虐待児			0.0% (0/47)	
既婚者中で子どもがいる率 (15～24歳)	—	—	76.5% (13/17)	62.4%

*:年齢を調整した標準値は平成12年国勢調査結果に基づき退園児の年齢分布に併せて算出した

挙子率についても同様に、全国値（平成17年国勢調査世帯の家族類型別妻の5歳階級年齢別子供を有する率、女子15～19歳 55.0%、女子20～24歳 62.9%）を基に、年齢調整挙子率を算出すると62.4%となり、調査結果76.5%の方が有意ではないが少し高かった。

〔2-3〕学歴

（1）最終学歴

最終学歴を調査A・Bから求め、全体的な割合を示した（図9）。中卒者が被虐待児の15.6%、非被虐待児でも5.4%を占めており、いずれも全国統計の0.2%（文部科学省，2005）に比して著しく高率であった。高校中退者は、被虐待児、非被虐待児のいずれも1割を越えており、全国統計の2.1～2.6%（文部科学省，2000；2001；2002；2003；2004；2005b）に比して顕著に高かった。そこで高校中退率について、高校卒業年齢に達している19歳以上に限って更に検討した。高校進学した後、中退に至る率は、被虐待児で18.8%、非被虐待児で14.7%であった。中退の少ない養護学校高等部（該当者は1名であった）を除き、全日制、定時制、通信制高校に限れば、被虐待児の25.0%、非被虐待児の16.8%が高校進学後中退している。19歳以上の児童の内、高校卒業に至らなかった率（中卒と高校退学を併せた割合）は、被虐待児で28.2%、非被虐待児では20.0%であった。

次に養護学校に在籍、卒業者の割合を求めた。情短を退所した19歳以上の児童で、高校進学をした者のうち、被虐待児では24.6%、非被虐待児では16.9%、全体では19.5%が養護学校高等部に進学していた。H17年度学校基本調査（文部科学省，2005a）における養護学校高等部の在籍者率1.13%に比して、極めて高率であった。中卒率、高校中退率のどちらも非被虐待児に比して被虐待児の方が高率で

あった。また養護学校率も被虐待児の方が高率であった。

次に高校卒業後に進学した割合について、児童養護施設のデータ及び全国のデータと比較した（図10）。本調査の対象には、中学生・高校生年齢も含まれるため、19歳以上に限定して比較した（N=223人）。なおここで言う「高校卒業」とは、全日制、定時制、単位制高校を卒業したものとし、養護学校高等部卒業は児童養護施設、全国のデータとの整合性のため、除いた。また「進学・大学」とは、4年制大学・短期大学・専修学校・公共職業能力開発施設などに進学したものを示す。比較した全国データは文部科学省「平成17年度学校基本調査」（2005a）、児童養護施設のデータ（N=840人）は、全国児童養護施設協議会調査研究部「平成17年度児童養護施設入所児童の進路に関する調査報告書」（2006）によるものである。情短退所児の高卒後進学率63.2%は全国の高卒後進学率74.3%に比べてやや低く、児童養護施設の進学率20.5%より高かった。ただし児童養護施設の進学率は、児童養護施設で高校を卒業した者を対象にした調査結果に基づいているのに対して、本調査の対象となった情短の退所児の進学率は、既に家庭復帰した児童も含まれている。

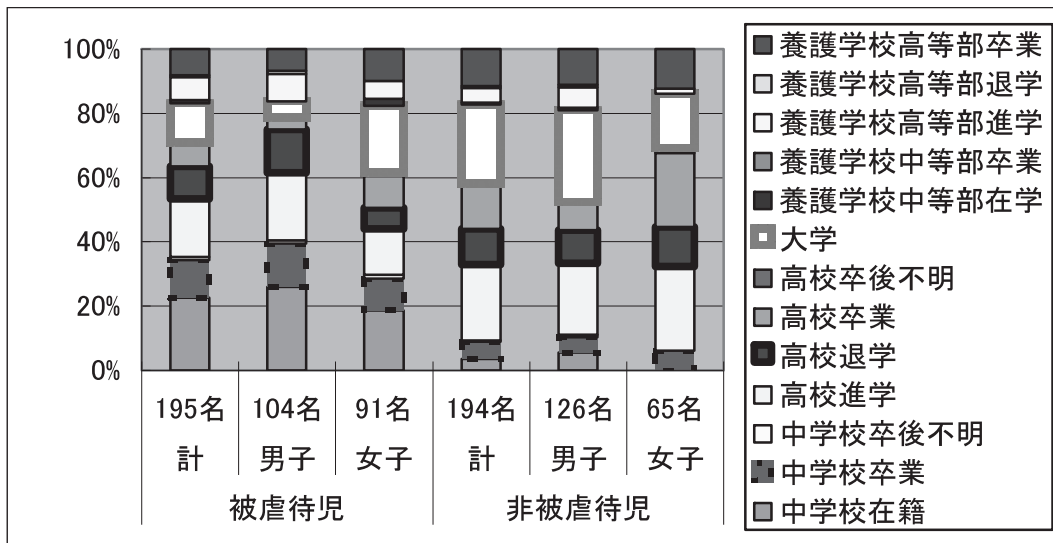


図9 虐待有無別、男女別 最終学歴

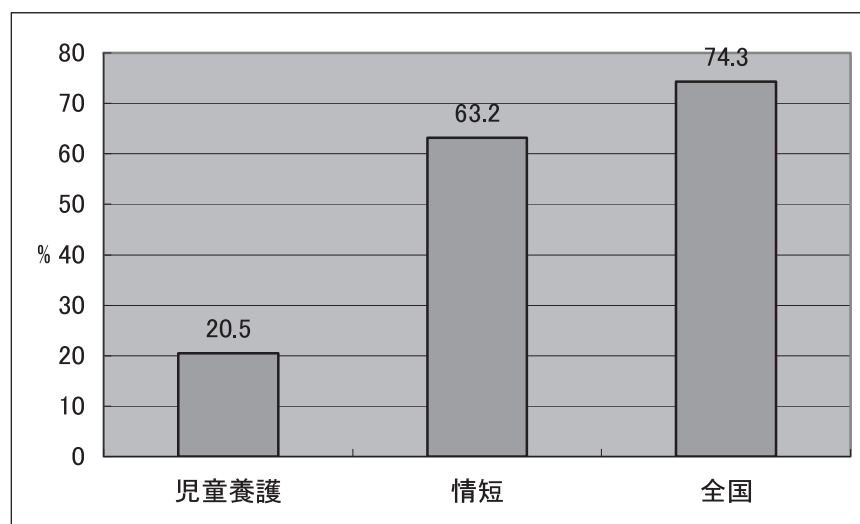


図10 高卒後進学率（全国、児童養護との比較）

(2) 虐待種別と中卒、高卒、進学割合

学歴に関連する虐待の特徴を検討するため、現在16～18歳の退所児の中卒者割合および19歳以上の退所児中の中卒者割合、高卒者割合、大学進学割合について、虐待種別および入所時のリスクアセスメントの各項目のあり、なし群間で比較した(表5)。

被虐待と非被虐待とで比較すると、被虐待児に中卒が多く見られた(16～18歳：被虐待20.0%非被虐待8.3%，19歳以上：被虐待11.5%非被虐待4.8%)。しかし高卒率、大学進学率では被虐待と非被虐待の差は見られなかった(高卒率：被虐待16.7%非被虐待15.9%，大学進学者率：被虐待25.6%非被虐待29.0%)。

虐待種別との関係は、中卒はネグレクトを受けた児に有意に多く見られた。またネグレクトを受けた児の大学進学率は16.7%であるのに対し、ネグレクトを受けていない児では34.2%であった。入所時のリスクアセスメント項目との有意な関係は幾つか示唆された(資料5参照)。中卒者割合は親の被虐待歴があった群の方が有意に多く、経済問題があった群で多い傾向がみられた。高校中退者割合は、親に性格問題があった群や虐待の自覚が無かった群で多い傾向がみられた。大学進学者割合は経済問題が無かった群で高い傾向にあり、また、虐待が継続的に行われていた群、児の精神的問題が生じていた群、養育者の精神的状態に問題があった群で有意に高率であったが、元々心理的虐待を受けた母数が多いため、リスクアセスメント時(入所時)にはこれらの症状を有する者が多かった可能性が考えられる。退所時には次項のように改善していた。

表5 虐待種別と学歴

虐待の種別	16～18歳(除く中学生)		19歳以上				
	N	中卒率(%)	N	中卒率(%)	高卒率(%)	大学進学者率(%)	
被虐待	60	20.0	78	11.5	16.7	25.6	
非被虐待	36	8.3	145	4.8	15.9	29.0	
身体的	あり群	37	18.9	48	12.5	14.6	22.9
	なし群	28	17.9	32	9.4	18.8	28.1
性的	あり群	2	0.0	10	0.0	40.0	20.0
	なし群	63	19.0	70	12.9	12.9	25.7
ネグレクト	あり群	35	22.9	42	19.0 *	11.9	16.7
	なし群	30	13.3	38	2.6	21.1	34.2
心理的	あり群	24	16.7	43	0.0 *	14.0	32.6
	なし群	41	19.5	37	24.3	18.9	16.2

* : $p < 0.05$

(3) 最終学歴と退所時

(3-1) 退所時年齢、転帰先と最終学歴

さらに最終学歴と児童の特徴を検討するため、退所時の年齢、転帰先を示した(図11-1~3, 表6)。中卒で終わった児は14歳までに退所した児が多く、転帰先は家庭が少なく、自立支援施設、自立支援ホームが多かった。高校中退者と大学進学者は15歳以上で退所した児が多く、家庭復帰が7割を越し、自立も少なくなかった。

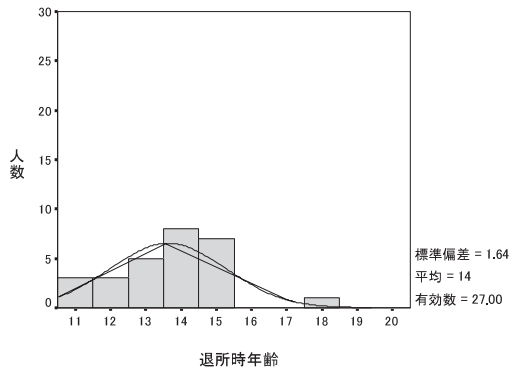


図11-1 退所時年齢分布 (中卒)

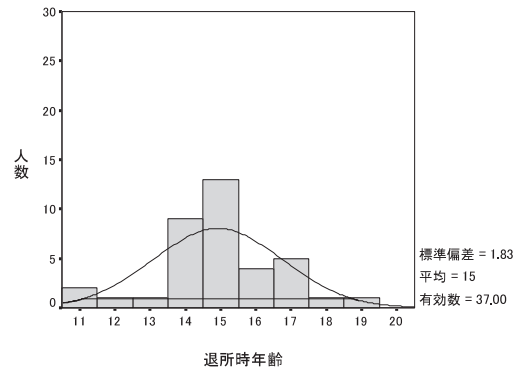


図11-2 退所時年齢分布 (高校退学)

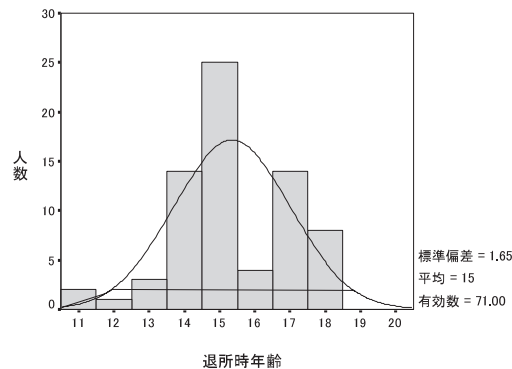


図11-3 退所時年齢分布 (大学進学)

表6 最終学歴と退所時転帰先 (転帰先が不明の児を除く)

	中卒 23名	高校退学 35名	大学 61名
家庭	52.2	74.3	75.4
児童養護施設	4.3	5.7	8.2
児童自立支援施設	21.7	2.9	1.6
グループホーム	13	5.7	4.9
自立	8.7	11.4	9.8
計(%)	100.0	100.0	100.0

(3-2) 大学進学者の退所時状態

大学進学者の特徴を把握するために、19歳以上の進学者の退所時の状態との関係を検討した（図12-1～2）。退所時の問題の有無間で大学進学率を較べると、被虐待児では大学進学率は社会ルール問題なし群、問題行動なし群で有意に高率で、非被虐待児では認知能力問題なし群で有意に高かった。

大学進学者には、社会ルールや、問題行動、認知能力で問題なしという特徴が見られ、これらの学校生活を送る上での重要性が改めて指摘された。

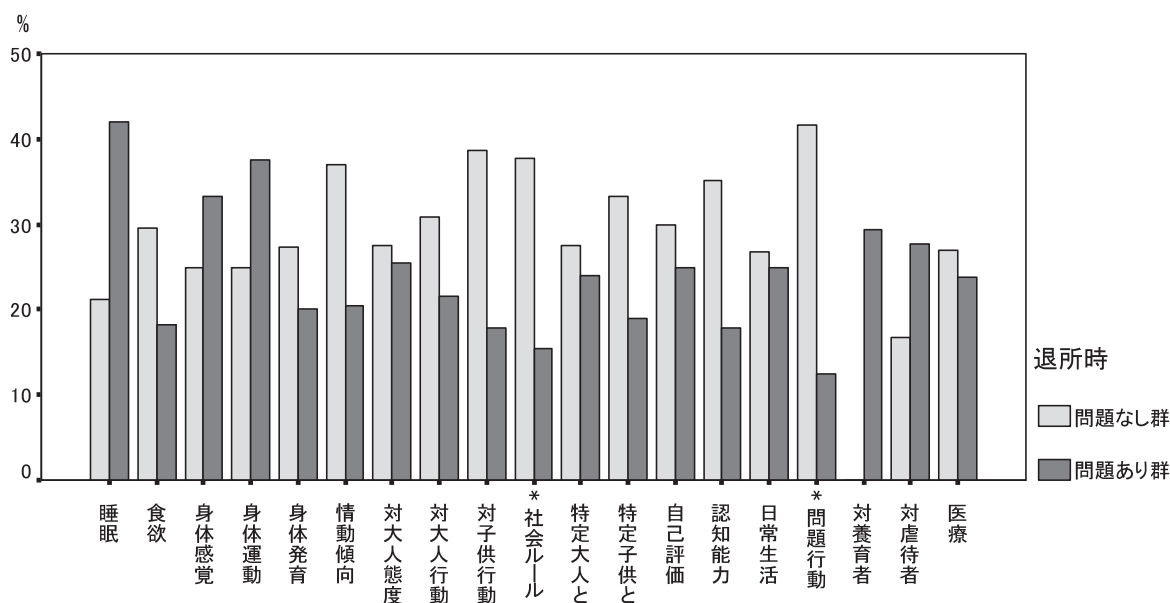


図12-1 大学進学率（19歳以上被虐待児） * : p < 0.05

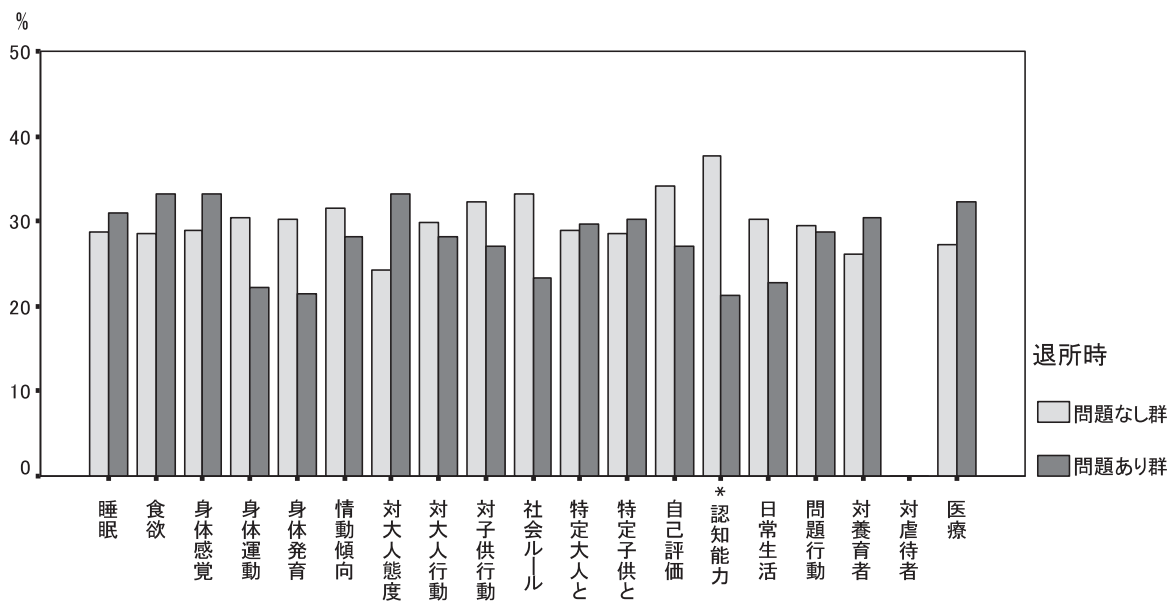


図12-2 大学進学率（19歳以上非被虐待児） * : p < 0.05

(3-3) 高校中退者の退所時状態

高校中退者の特徴を把握するため、高校進学者中の高校中退率を退所時問題の有無間で比較した(図13)。高校中退率は社会ルール問題あり、自己評価問題あり群、知的能力および学力低下、問題行動あり群で各問題なし群に較べて有意に高かった。

進学者とは反対に、高校中退者には社会ルール、学力、自己評価、問題行動などで問題があり、これらが学校生活を維持する上で重要であることがここでも言える。

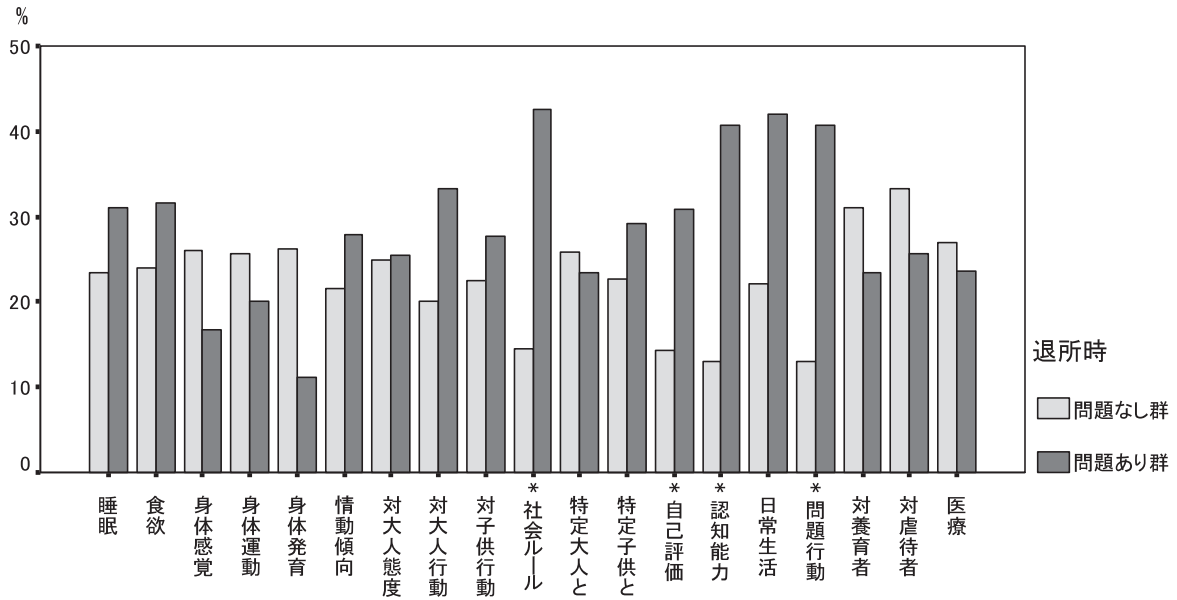


図13 高校中退率と退所時問題 (19歳以上) * : $p < 0.05$

〔2-4〕就労

(1) 就労状況、勤務状況と最終学歴

本調査で得られた現在の就学または就労状況について、被虐待児・非被虐待児、男女別に示した(図14)。在学と就職の割合では、被虐待児の方が在学が多く、就職が少なくなっているが、これは被虐待児の方が低年齢が多いため、被虐待児(平均年齢17.6歳)と非被虐待児(平均年齢19.2歳)の年齢分布による差と考えられる。

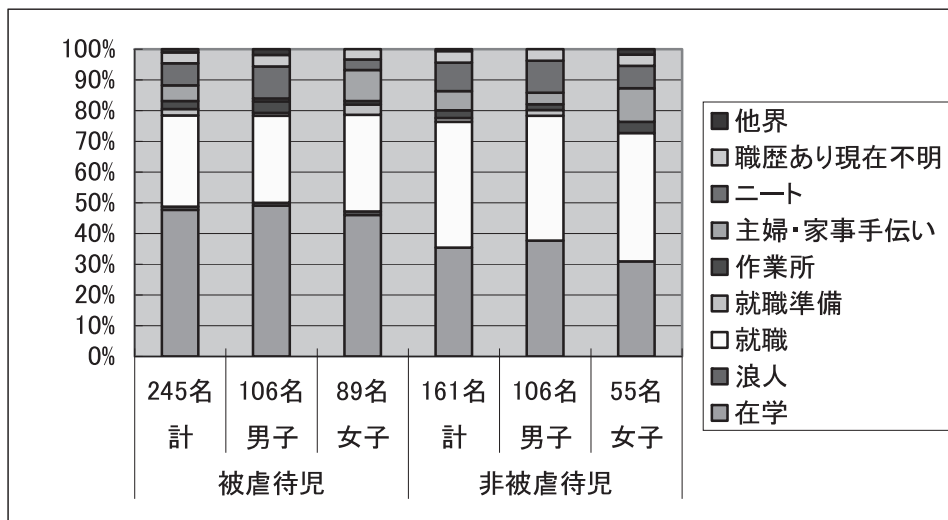


図14 虐待有無別、男女別、就学・就労状況

そこで高校在学期間と考えられる16歳~18歳と19歳以上で年齢を区切って就職率を見てみると、非被虐待児と被虐待児に統計的に有意な差はなかった(16歳~18歳:非被虐待児27.3%,被虐待児24.6%,19歳以上:非被虐待児48.7%,被虐待児56.6%)。ニート者割合にも有意差は見られなかった(16歳~18歳:非被虐待児9.1%,被虐待児8.2%,19歳以上:非被虐待児10.3%,被虐待児10.5%)。また男女差は、被虐待児で顕著に見られ($p=0.043$)、男子の方がニートが多く、女子の方が主婦・家事手伝いが多かった(資料3表1-7参照)。非被虐待児でも同様の傾向であった。

次に現在の就労状況、特にニート群の特徴を把握するため、最終学歴と就労状況の関連を検討した(図15)。顕著な特徴は、中卒と高校退学者は他と比べてニートが多かった。さらに勤務状況と最終学歴の関連を検討すると、中卒は他と比べて勤務をよく休むものが多かった(図16)。

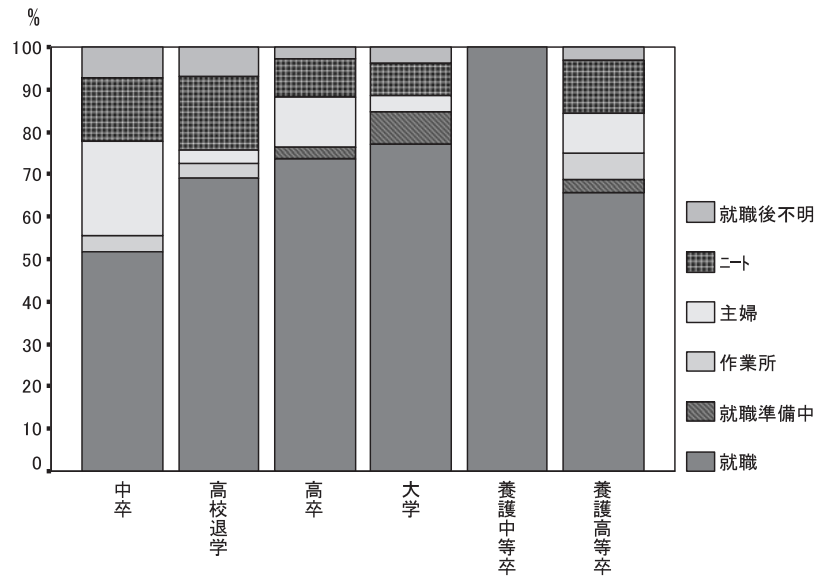


図15 最終学歴と就労状況

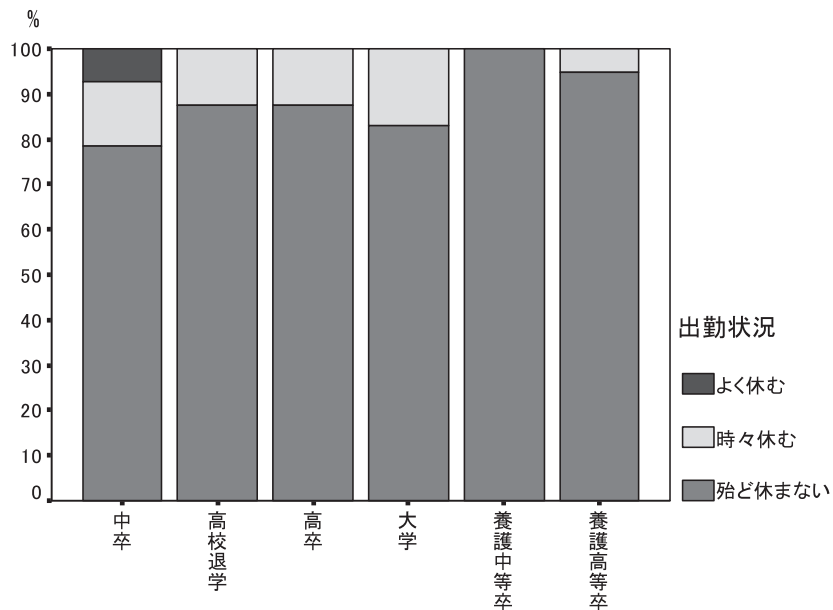


図16 最終学歴と勤務状況（出欠）

（2）入所前のリスクアセスメントと現在の就労・就学状況

年齢層別に、入所前のリスクアセスメント項目別に被虐待児中の就職者およびニート者の比率を求めた（資料3参照）。16-18才では、ニート者割合は養育者の性格的問題や対児感情・態度、虐待自覚に問題があった群で有意に高かった。就職者割合は経済問題があった群で有意に高く、被虐待による入院歴有り、児の親や家庭に対する気持ち、夫婦問題、生活環境、援助効果に問題があった群でも高い傾向にあった。19才以上では、ニート者割合は養育者の性格的問題があった群で高い傾向があり、就職者割合は経済問題があった群で有意に高かった。

いずれの年齢層においても、ニート者割合は入所前の養育者の性格的問題（衝動的、未熟、攻撃的、偏り、共感性欠如など）と、就職者割合は経済問題との関連性がみられた。

(3) 退所時の状態と現在の就労・就学状況

さらに退所時の問題の有無間で、ニート者と就職者の割合を求め、その見の特徴を検討した。ニート者割合は特定の大人との関係、特定の子供との関係、自己評価、医療問題あり群で有意に高かった(図17)。退所時の問題の有無と就職者割合との関係は、食欲問題なし、対大人態度問題なし、医療問題なし群で就職者割合が高かった(図18)。

ニート者割合は、養育者の性格的問題や兄の特定の大人との関係、自己評価等と関連していることを鑑みると、大人との関係性が作れるかどうか就労と関連していることが推測される。

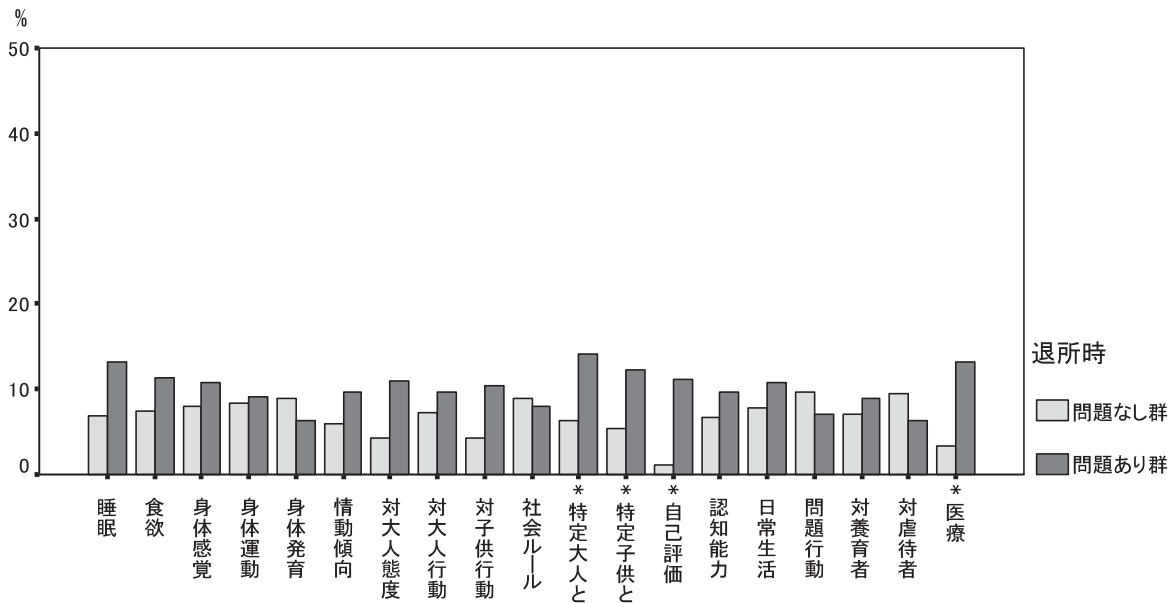


図17 退所時の問題の有無とニート者割合 * : p < 0.05

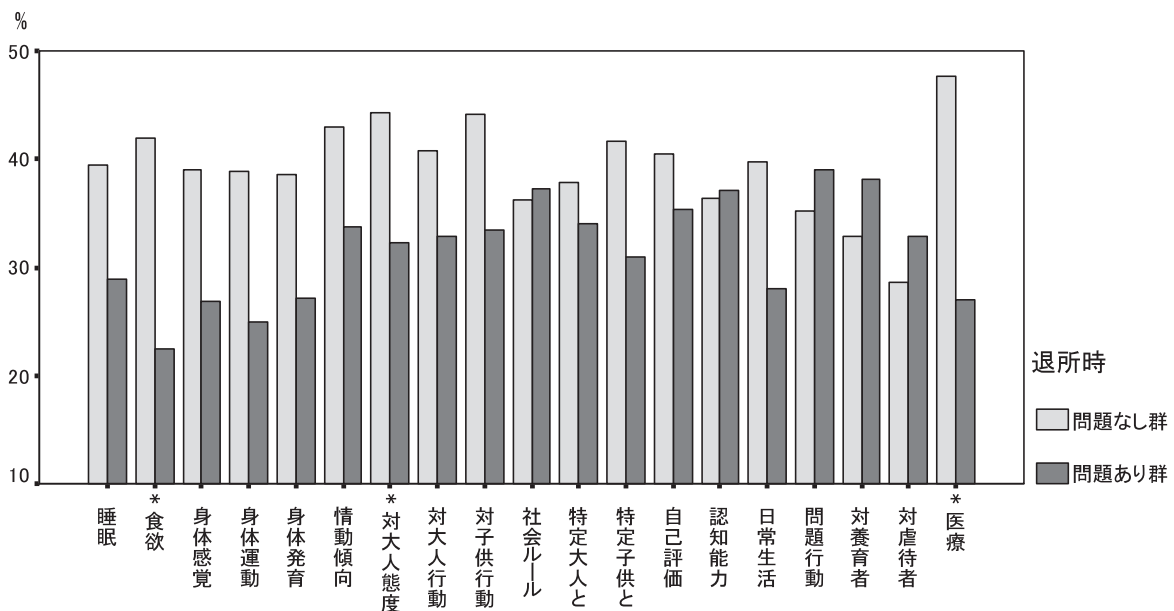


図18 退所時の問題の有無と就職者割合 * : p < 0.05

〔2－5〕社会的状況のまとめ

情短退所児は、家族との生活が困難且つ治療が必要で入所した子ども達であるが、本調査の結果、退所後は被虐待児の4割、非被虐待児の7割が家族と生活しており、一定期間の家族からの分離と適切な治療により、家庭復帰が可能なケースが多々あることが示された。同時に5年以内に居住形態が変化している児が5割おり、安定した生活基盤が得にくい状況も示された。

情短退所児の現在の社会適応を見てみると、8割以上は就学または就労し、登校・出勤しており、種々の心配な点はあるながらも社会適応している様子が示された。しかし、高校に進学せず中卒で修了した児が全国値より顕著に高く、且つ、就労もしない例も少なくなかった。そのような児には、中卒前に退園した児が多く、学力や自己評価の低さ、社会ルールに問題が見られるという児童の抱える問題の他、経済的問題やネグレクトなどの問題を抱えている家庭の場合が多かった。先の家庭復帰の可能性の一方で、本人自身が進路を決め、自立可能な年齢まで施設で見守る必要性も同時に示されたと言えよう。

社会的状況を総括すると、対人関係、社会ルールなどに困難を抱えるグループが、居住が不安定であったり、大学進学率が低いという現状の中、自立・結婚・仕事などの成人期の重要な課題に早くに立ち向かうことが求められる状況にあることが指摘されたと言えるだろう。

3 予後の心身健康状態

〔3-1〕心身健康状態

現在の心身の健康状態について、職員記入用（調査B）の質問項目ごとに検討した。

（1）元気さ

Q1 元気について検討した（図19，資料3表1-3参照）。図より明らかなように、“悪い”と回答されたものはほとんどなく（被虐待児・非被虐待児でいずれも女子1名ずつ）概ね元気に過ごしており、被虐待児と非被虐待児の差、男女差も見られなかった。

縦断研究で得られた子どもの状態像と現在の状態の関連を検討することが目的のひとつであるが、本項目は“悪い”と回答した者が2名であるため、検討は行わなかった。

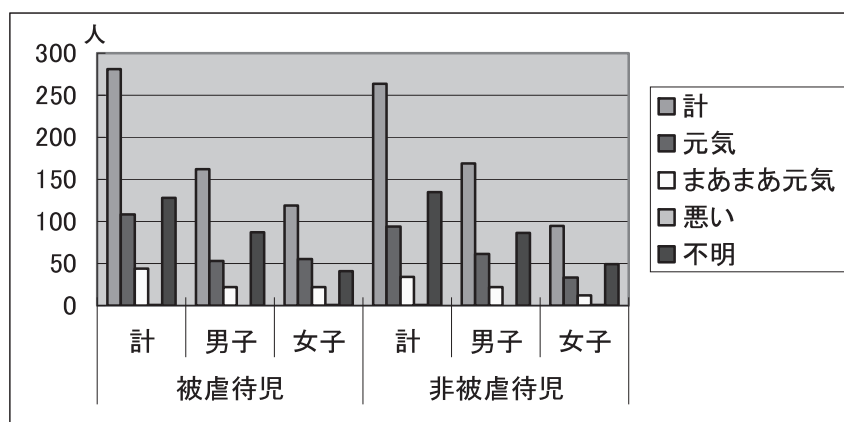


図19 虐待有無別、現在の元気さ

（2）出欠

Q6 学校あるいは仕事の出欠について検討した（図20，資料3表1-8参照）。把握された児童の8割以上が“ほとんど休まない”で学校・仕事に通っていた。

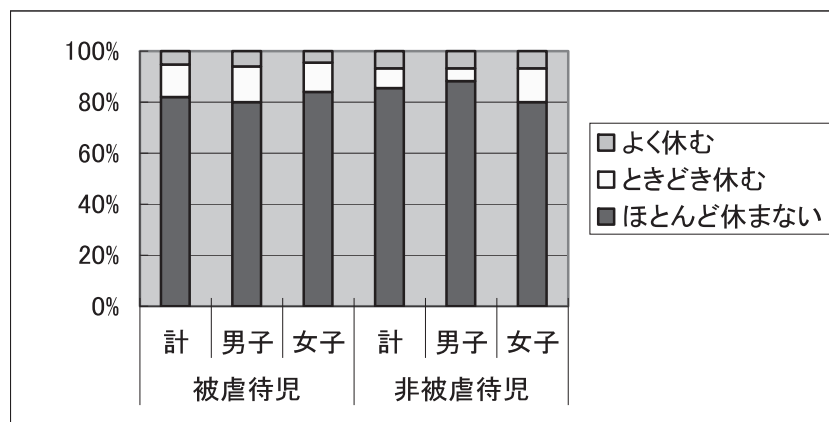


図20 虐待有無別、現在学校・仕事の出欠

次に、入所中どのような児童が現在学校や仕事をよく休むのかを把握するため、縦断研究の入所時と退所時の各問題有無別によく休む率を求めた。

(2-A) 入所時状態と現在の出欠

被虐待児では入所時に特定の子どもとの関係に問題があった群で、現在学校や仕事を休む率が高い傾向があり(図21)、非被虐待児では、食欲、情動傾向、対子供行動、対大人態度に問題があった群の方が現在休む率が有意に高かった(図22)。

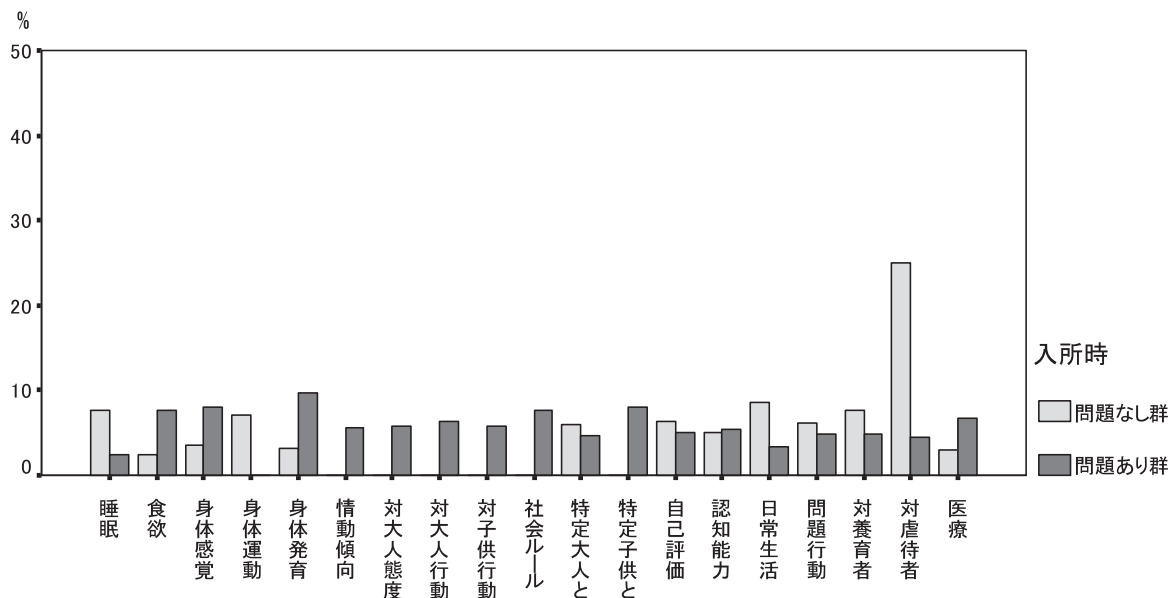


図21 現在学校や仕事をよく休む率と入所時の問題（被虐待）

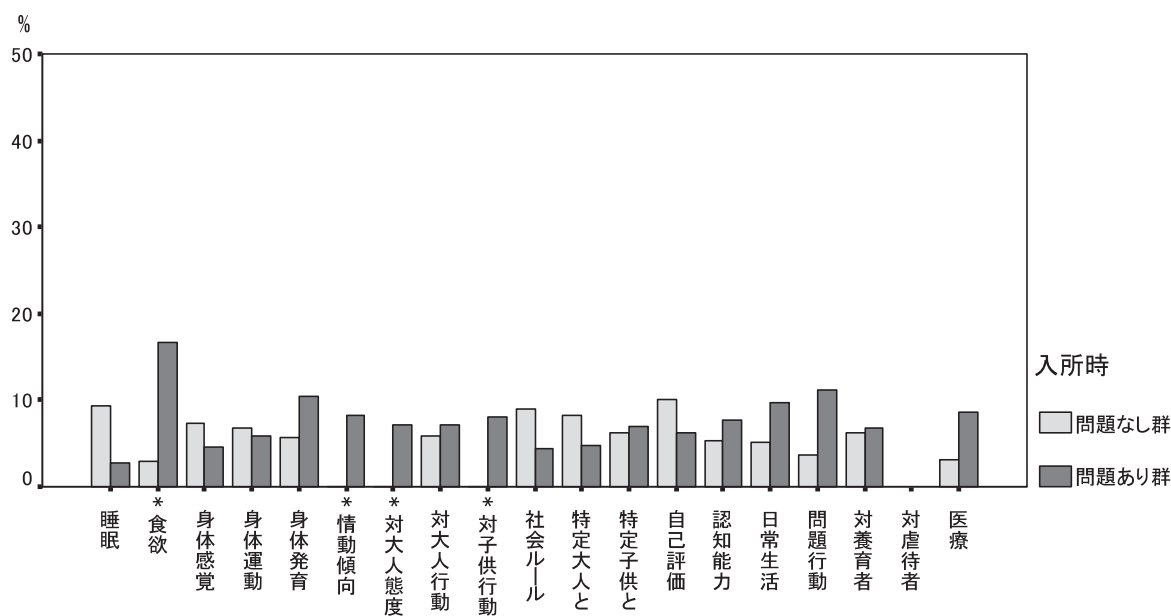


図22 現在学校や仕事をよく休む率と入所時の問題（非被虐待） * : p < 0.05

(2-B) 退所時

被虐待児では退所時に自己評価に問題があった群で現在休む率が有意に高く、対大人や対子供関係に問題があった群でも高い傾向がみられた (図23)。非被虐待児では、医療 (児童が医学的ケアを必要としている、あるいは職員が精神科医等から助言を受けている) 問題があった群の方が現在休む率が有意に高かった (図24)。

入所時および退所時の状態と現在の出欠状況を概観すると、現在仕事や学校を休む率は、被虐待児では入所時も退所時も子どもとの関係、退所時の自己評価と関連し、非被虐待児では入所時の情動や対人関係、退所時の医療問題と関係していた。

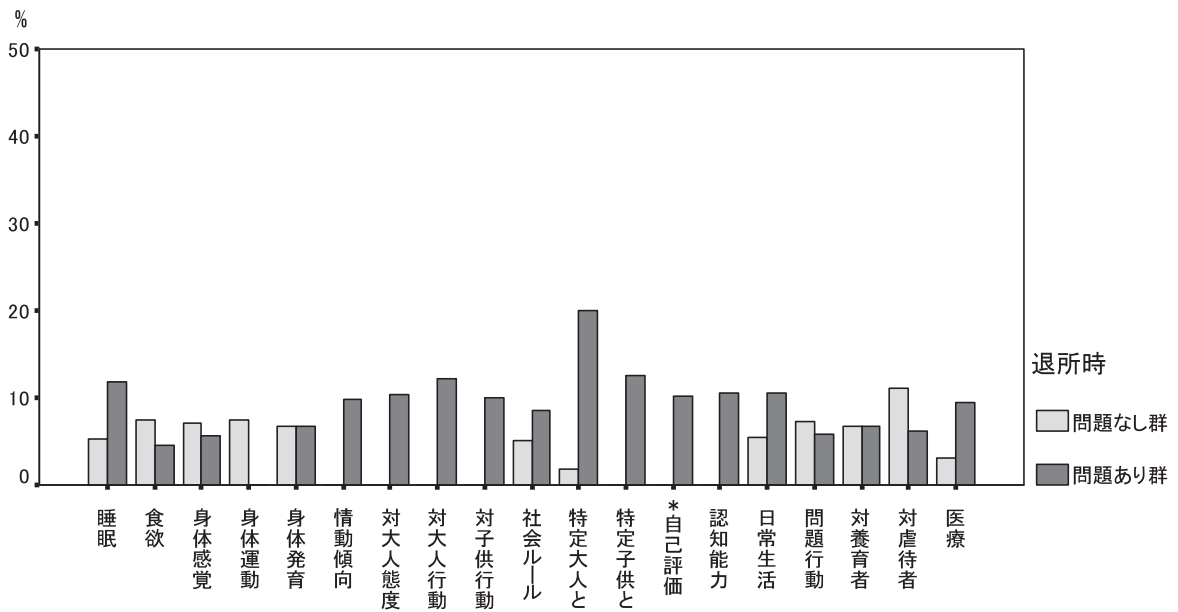


図23 現在学校や仕事をよく休む率と退所時の問題 (被虐待) * : $p < 0.05$

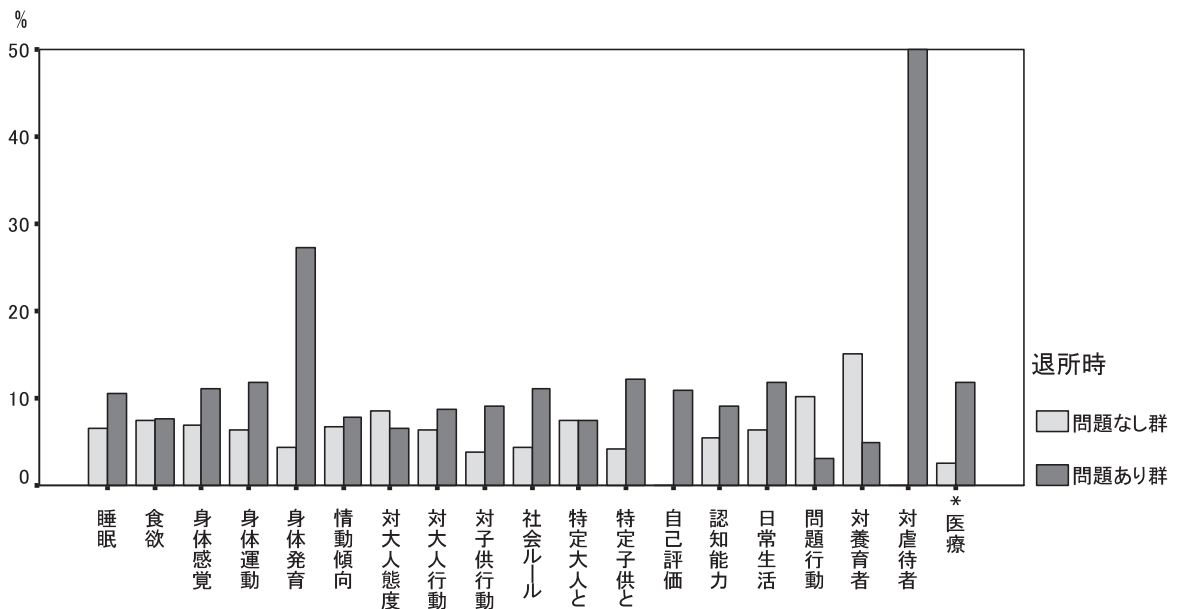


図24 現在学校や仕事をよく休む率と退所時の問題 (非被虐待) * : $p < 0.05$

(3) 家族問題

次にQ7現在の家族との関係の項目について検討した(図25, 資料3表1-9)。把握している児童のうち、被虐待児で46.9%、非被虐待児で63.3%が“特に困ったことはない”と回答していた。

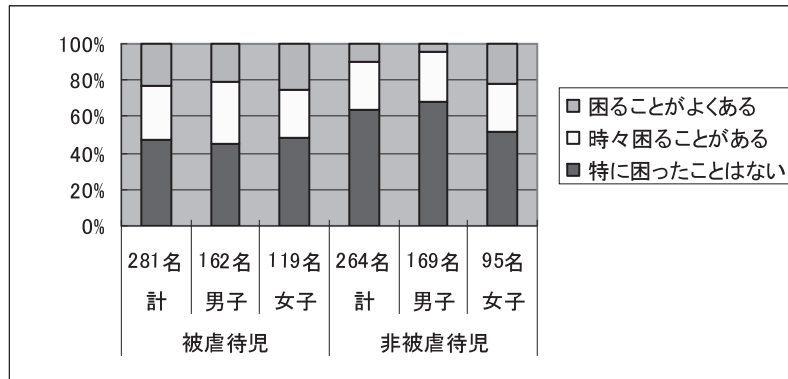


図25 虐待有無別、男女別、現在の家族関係

次に、入所中どのような児童が現在、家族との間で困ることがあるのかを把握するため、縦断研究の入所時と退所時の各問題有無別に、困ることがある率を求めた。

(3-A) 入所時

被虐待児では入所時に社会ルールに問題があった群の方が現在、家族との間で困ることがある率が有意に高く、非被虐待児では入所時に食欲、情動傾向、対子供行動に問題があった群の方が現在の対家族問題の率が有意に高かった(図26, 27)。

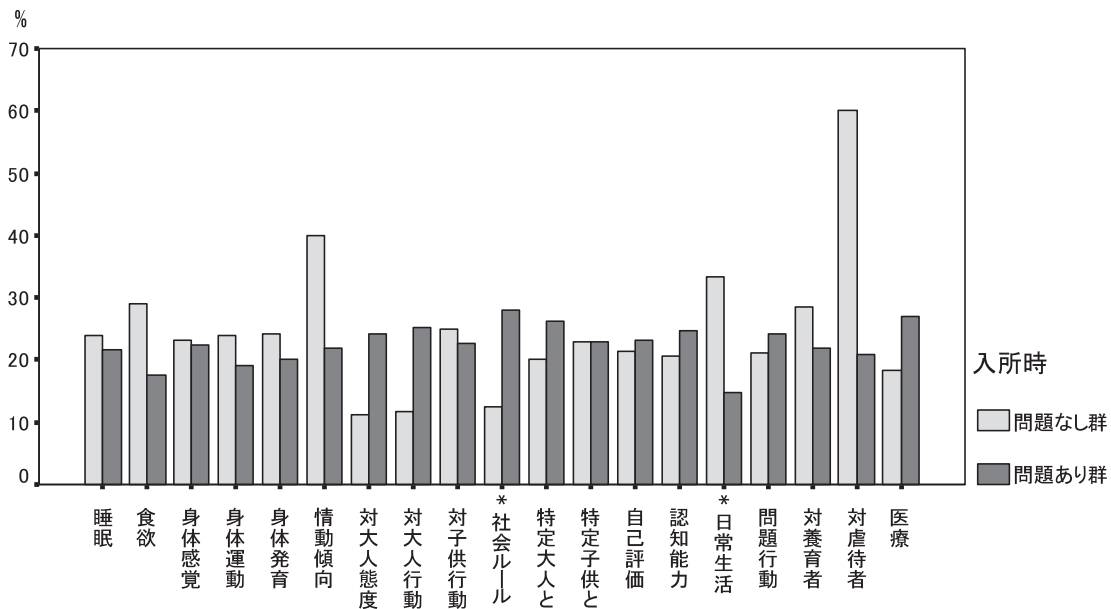


図26 入所時問題と家族との間で困ることがある率(被虐待) * : p<0.05

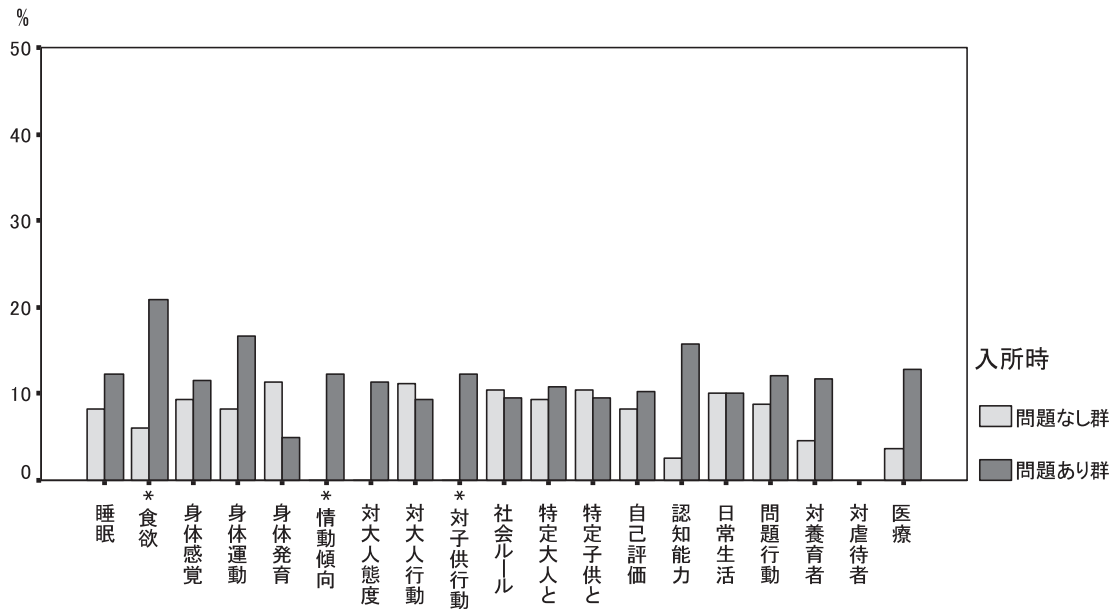


図27 入所時問題と家族との間で困ることがある率 (非被虐待) * : $p < 0.05$

(3-B) 退所時の状態と現在の家族との関係

被虐待児では退所時に情動傾向、対大人行動、社会ルール、特定の大人との関係、特定の子供との関係、認知能力に問題があった群の方が、現在、家族との問題を有する率が有意に高く、非被虐待児では情動傾向に問題があった群の方が有意に高かった (図28, 29)。

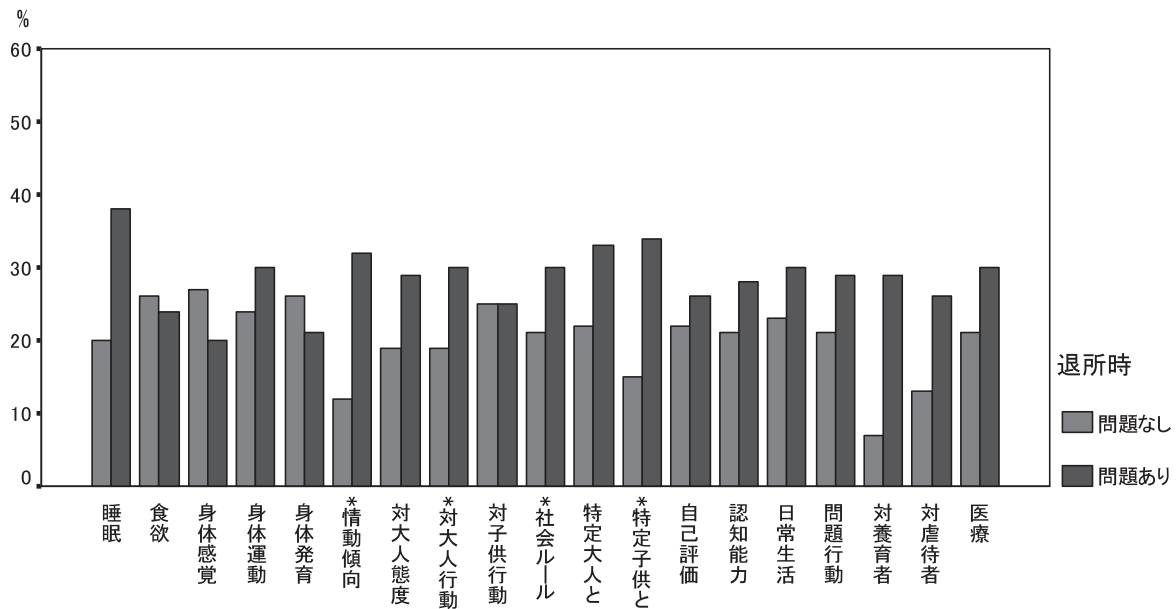


図28 退所時問題と家族との間で困ることがある率 (被虐待) * : $p < 0.05$

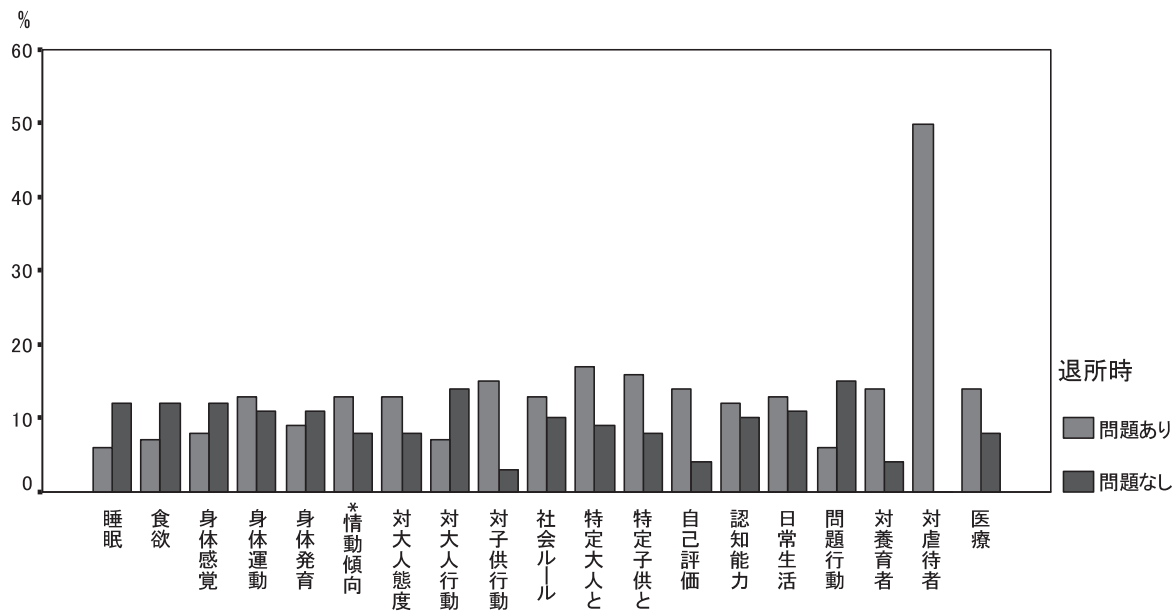


図29 退所時問題と家族との間で困ることがある率 (非被虐待) * : p < 0.05

現在の家族との間の問題について概観すると、被虐待児では入所時も退所時も社会ルールに問題ある群で困る率が高く、更に退所時に情動傾向、特定の大人や子供との関係、学力に問題ある群で困る率が高かった。非被虐待児では、入所時も退所時も情動傾向に問題ある群の方が困る率が高く、その他入所時に食欲、対子ども行動に問題ある群の方が、現在困る率が高かった。

(4) 生活・行動問題

次にQ8児童の生活・行動についての項目を検討した(図30, 資料3表1-10)。全体的に見れば、7割強くらいの児童については、“特に心配がない”か“何とか大丈夫”と思える状態にあった。虐待の有無で比べてみると、“特に心配なことはない”のは被虐待児で27.1%、非被虐待児39.5%と非被虐待児の方が施設職員は特に心配を感じずに見ているといえる。男女差を見ると“何とか心配”なのは、被虐待児では男子の方が多く(男子33.8%、女子21.1%)、非被虐待児では反対に女子の方が多かった(男子19.0%、女子30.0%)。

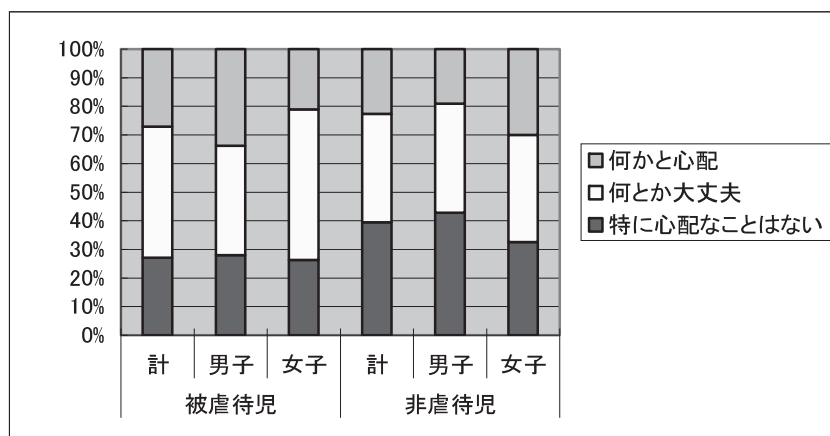


図30 虐待の有無別、男女別、現在の生活行動

次に、入所中にどのような児童が現在の生活・行動で問題があるのかを把握するため、縦断研究の入所時と退所時の各問題有無別に、現在の生活や行動に心配なことがある率を求めた。

(4-A) 入所時の状態と現在の児童の生活・行動に心配なことがある率との関係

被虐待児は入所時に対大人行動、社会ルール、自己評価、医療に問題があった群の方が、現在の生活・行動に心配なことがある率が有意に高かった(図31)。非被虐待児では、入所時に食欲に問題があった群の方が現在の生活・行動に心配なことがある率が有意に高かった(図32)。

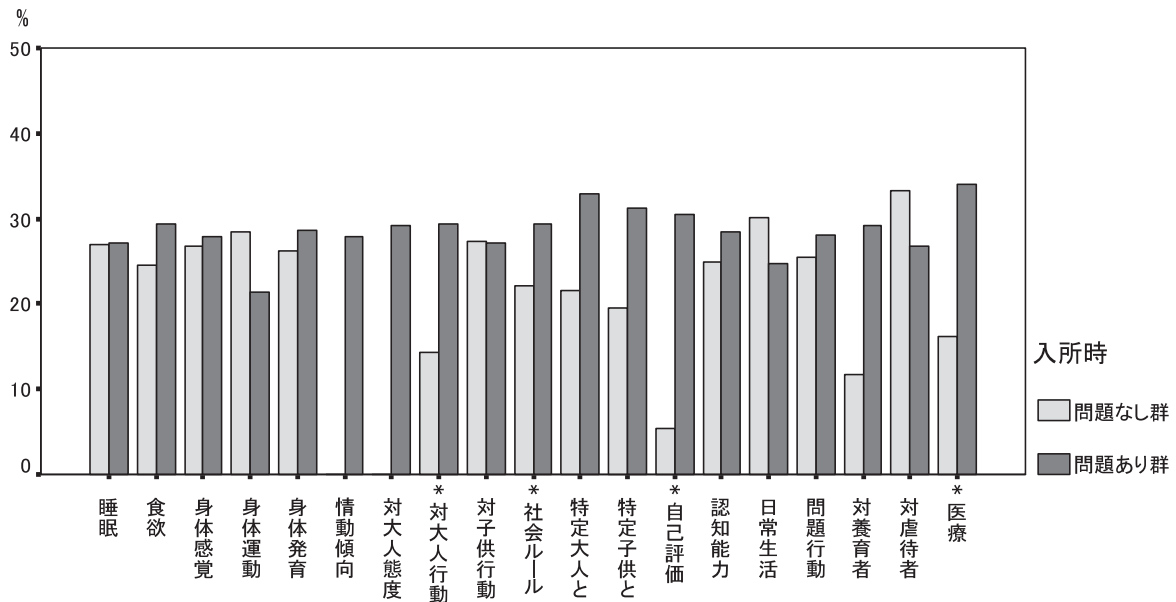


図31 入所時問題と児の生活や行動に心配なことある率(被虐待) * : p < 0.05

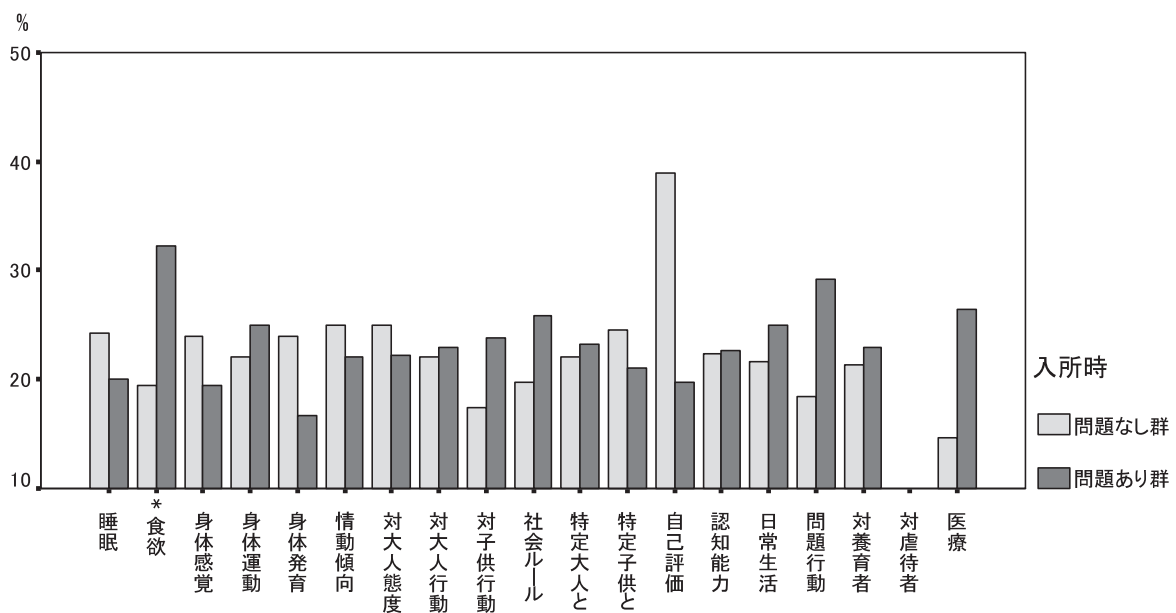


図32 入所時問題と児の生活や行動に心配なことある率(非被虐待) * : p < 0.05

(4-B) 退所時の状態と現在の児童の生活・行動に心配なことがある率との関係

被虐待児では退所時に、情動傾向、対大人行動、対子供行動、社会ルール、特定大人との関係、特定子供との関係、自己評価、問題行動、対虐待者、医療に問題があった群の方が現在の生活・行動に心配なことがある率が有意に高く（図33）、非被虐待児では、社会ルール、自己評価に問題があった群の方が有意に高かった（図34）。

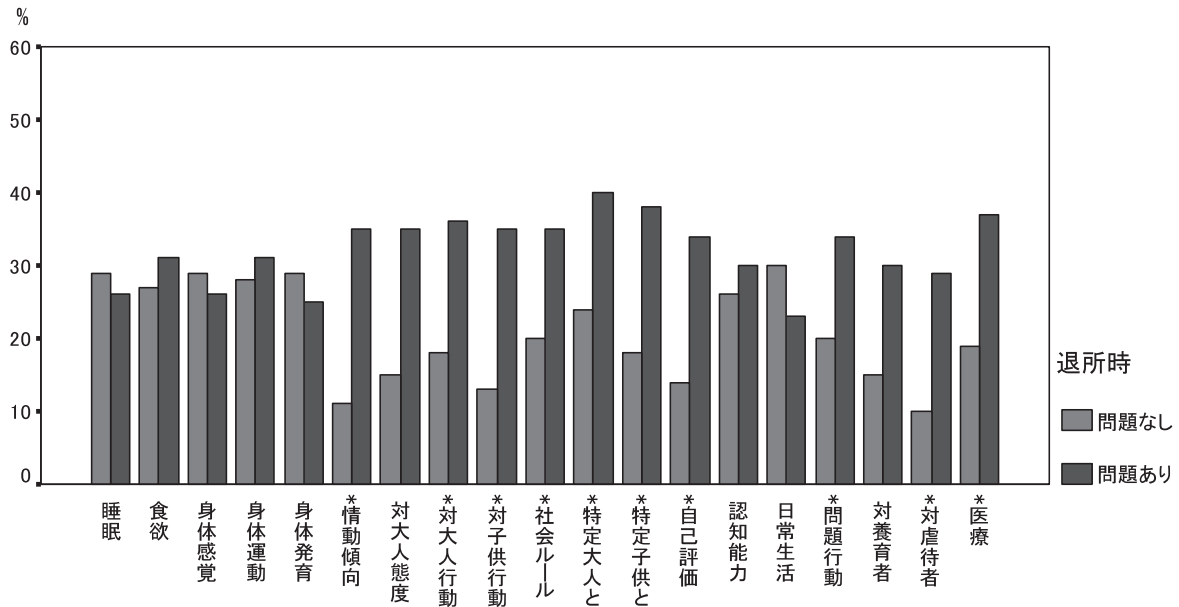


図33 退所時問題と児の生活や行動に心配なことある率（被虐待） * : $p < 0.05$

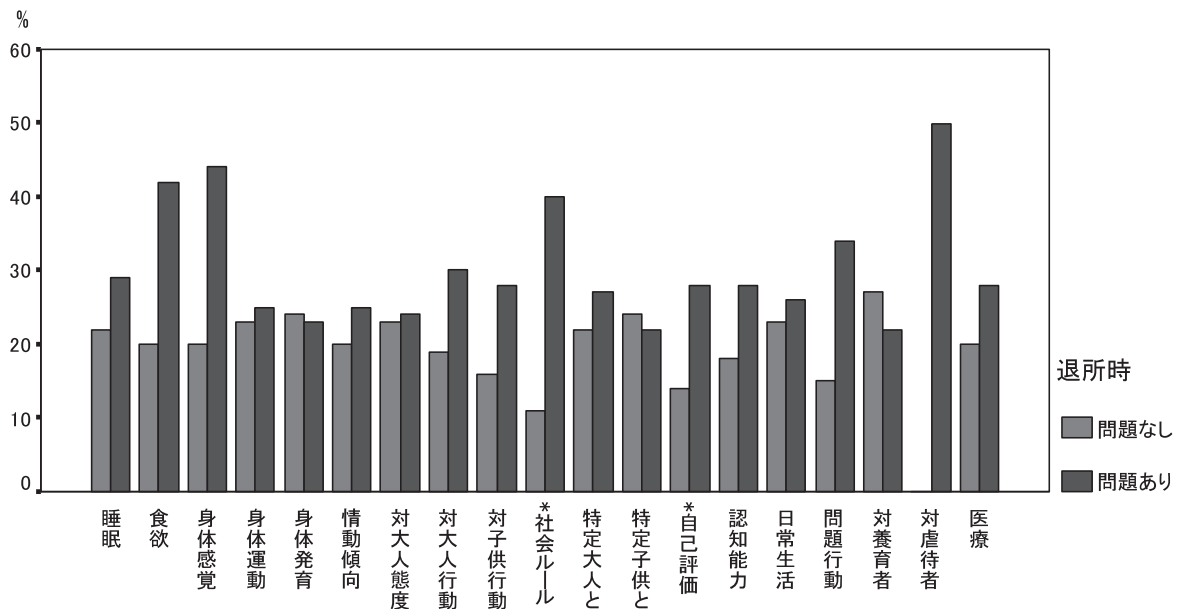


図34 退所時問題と児の生活や行動に心配なことある率（非被虐待） * : $p < 0.05$

施設職員から見ると、退所後の現在も生活・行動が心配な児童は、被虐待児では、入所時も退所時においても対大人行動、社会ルール、自己評価、医療の問題、更に退所時の情動傾向、対子供関係、問題行動と関連し、非被虐待児では入所時の食欲の問題、退所時の社会ルール、自己評価の問題と関連していた。

(5) 自殺

今回の調査において、対象571名（11歳～25歳）の内3名（0.53%）が自殺していることが明らかになった。2名が男児で1名が女児、2名が被虐待児・1名が非被虐待児であった。

全国の自殺の疫学データと比較すると（国立精神・神経センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター，2006）、2004年の男性自殺率は人口10万人に対して、10歳～14歳では0.9人（0.000009%）、15歳～19歳9.1人（0.000091%）、20歳～24歳23.8人（0.000238%）であるから、本調査の0.53%はかなりの高率であったと言える。しかし自殺企図などを目の当たりにすることもある情短職員の印象からすると、職員の心配に比して少ないと思われる。

〔3-2〕心身健康状態の関連性

(1) 心身健康状態に関する4項目間の関連性

これまで見てきた現在の状態に関する4項目（元気さ、登校・出勤状況、家族との問題、生活・行動の問題）は児の精神的状態と関連するが、被虐待児も非被虐待児においても、4項目間に有意の順位相関が示された（表7）。特に、生活・行動の問題は他の3項目のいずれとも高い相関を示しており、児の心身の健康度の指標と考えても良からう。

また、Q7家族問題とQ8現在の生活行動では被虐待児でも非被虐待児でも中程度の正の相関が見られ、両者とも児の行動問題に心配なことがない群では家族との間でも困ることが無く、心配なことが有る群では困る率が高かった。改めて子どもの状態と家族の問題の関連の高さを示した結果と言えよう。

表7 現在の状態間の順位相関係数

		被虐待児	非被虐待児
BQ1 元気さ	— BQ6 殆ど休まない	0.530 *	0.385 *
	— BQ7 家族と困ることなし	0.385 *	0.109 *
	— BQ8 生活・行動で心配なし	0.410 *	0.416 *
BQ6 殆ど休まない	— BQ7 家族と困ることなし	0.355 *	0.342 *
	— BQ8 生活・行動で心配なし	0.317 *	0.410 *
BQ7 家族と困ることなし	— BQ8 生活・行動で心配なし	0.523 *	0.558 *

(2) 治療効果と現在の問題

次に現在の元気、出欠状況、家族問題、児の生活行動問題について、治療効果別に問題がある率を求めた（表8）。被虐待児も非被虐待児も同様に、現在の問題を有する率は改善群で低く、中断群で高かった。

表8 治療効果別、現在の問題

現在の問題		治療効果		
		改善	やや改善	中断/不変
まあ元気あるいは悪い率	被虐待児	23.5%	34.9%	50.0%
	非被虐待児	20.0%	39.3%	15.4%
学校や仕事をよく休む率	被虐待児	0.0%	11.4%	25.0%
	非被虐待児	3.2%	11.1%	10.0%
家族との関係で困ることある率	被虐待児	16.7%	32.4%	37.5%
	非被虐待児	0.0%	22.2%	100.0%
生活・行動で心配なことある率	被虐待児	11.1%	37.1%	54.5%
	非被虐待児	11.4%	35.8%	66.7%

(3) 退所理由と現在の問題

現在の元気、出欠状況、家族問題、児の生活行動問題について、退所理由別に問題がある率を求めた（表9）。被虐待児も非被虐待児と同様に、現在の問題を有する率は退所理由が成長群で低く、中断群の方が高かった。悪いあるいはまあ元気の率、よく休む率は非被虐待児の中断群で特に高く、家族問題や児の生活行動問題は被虐待児の中断群で特に高かった。家族問題は非被虐待児では退所理由による差がなかった。

表9 退所理由別、現在の問題

現在の問題		退所理由	
		成長	中断
まあ元気あるいは悪い率	被虐待児	27.0%	39.0%
	非被虐待児	25.0%	45.9%
学校仕事をよく休む率	被虐待児	3.7%	16.7%
	非被虐待児	1.6%	33.3%
家族との関係で困ることある率	被虐待児	22.6%	33.3%
	非被虐待児	11.1%	11.1%
生活・行動で心配なことある率	被虐待児	23.8%	40.5%
	非被虐待児	19.8%	38.5%

(4) 退所後年数と現在の問題

現在の元気、出欠状況、家族問題、児の生活行動問題について退所後年数別に問題がある率を求めた。

元気さについては悪いあるいはまあ元気の率は退所後2年、3年群33.3%と高く、4年群26.4%、5年群28.3%とやや低くなっていた(図35)。現在よく休む率は退所後2年以内の群が最も高く21.1%で、その後3年群で5.7%、4年群で6.7%と低くなり、5年群で3.5%と最も低かった(図36)。家族との関係で困ることある率も2年群が31.6%と最も高く、退所後5年群で困る率が14.0%と最も低かった(図37)。児の生活行動問題で心配なことある率でも退所後2年群が35.7%と最も高く、その後、3年群26.3%、4年群29.2%とやや低くなり、5年群で19.5%と最も低かった(図38)。

現在の問題は、退所後間もない児の方が問題がある率が高く、年数と共に減少していた。退所後2年以内で家族、社会生活への適応という大きな課題に取り組む必要があり、それ以降は年数と共に徐々に適応していく様子が伺われる。

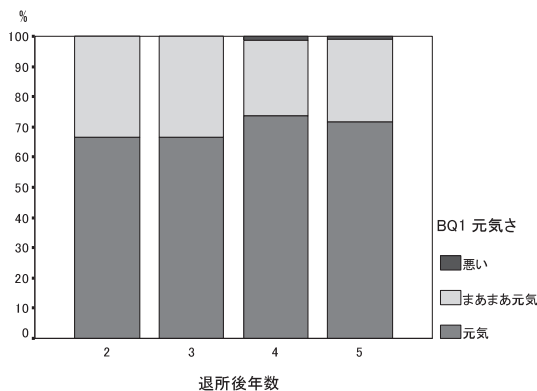


図35 退所後年数別元気率

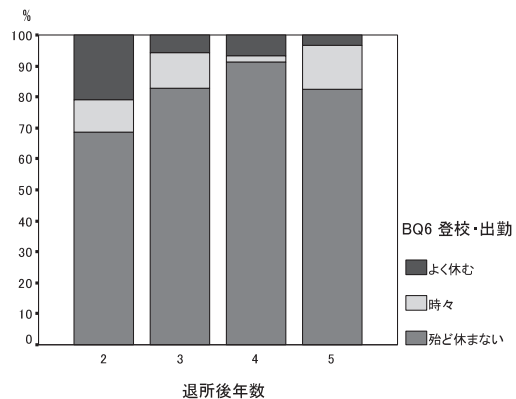


図36 退所後年数別登校・出勤率

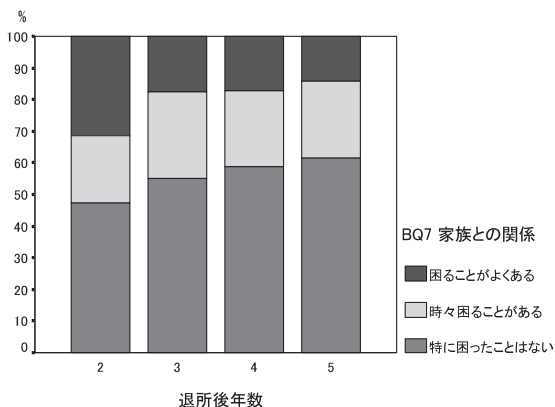


図37 退所後年数別家族関係問題率

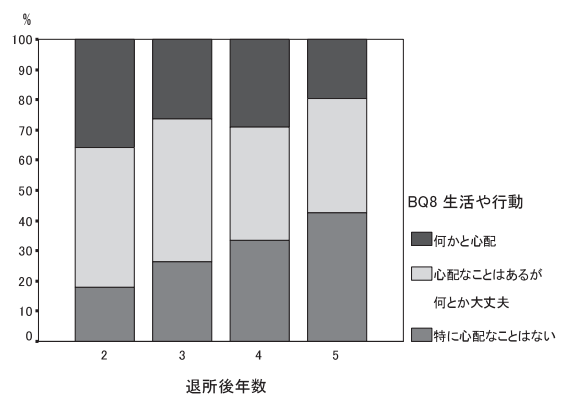


図38 退所後年数別生活行動問題率

[3-3] 心身健康状態のまとめ

心身健康状態をまとめると、意外に良い結果であったと言えるのではないだろうか。特に治療効果があった児、成長により退所した児が現在の状態も比較的良いということは、情短におけるケアが、虐待の有無に関わらず、一定の効果を果たしていると言える。

また今回の調査で明らかになったこととして、退所後2年以内は家族との関係、生活行動、出欠状

況などで問題があるが、その後は年数と共に問題が減少していたことが挙げられる。ケアシステムから離れた直後の2年間の環境・対人関係が退所後の1つの山となっている。これを乗り越える児童の特徴は、入所中の児童の状態から予測されうるものであり、社会ルールに問題がないこと、対人関係に問題がないことなどが、予測しうる因子であるだろう。つまり、情短施設における援助のターゲットの一つは、社会ルールと対人関係の問題の改善と言えそうであり、そのことが退所後の心身健康状態にも関連している。このことは既に日々施設での取り組みで実感しているのではないだろうか。

4 施設との関係

〔4-1〕アフターフォロー

アフターフォローを行っている状況についてまとめた（図39、資料3表1-12）。当施設でアフターフォローを行っている児は15～16%程度で、アフターフォローを行っていない児が75%であった。アフターフォローを行っている機関の内訳は図40に示した。

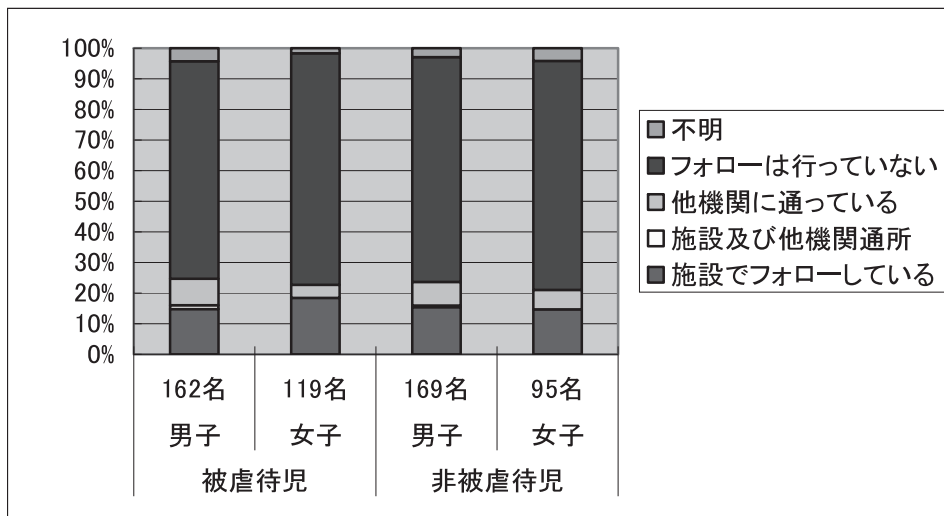


図39 アフターフォローの状況

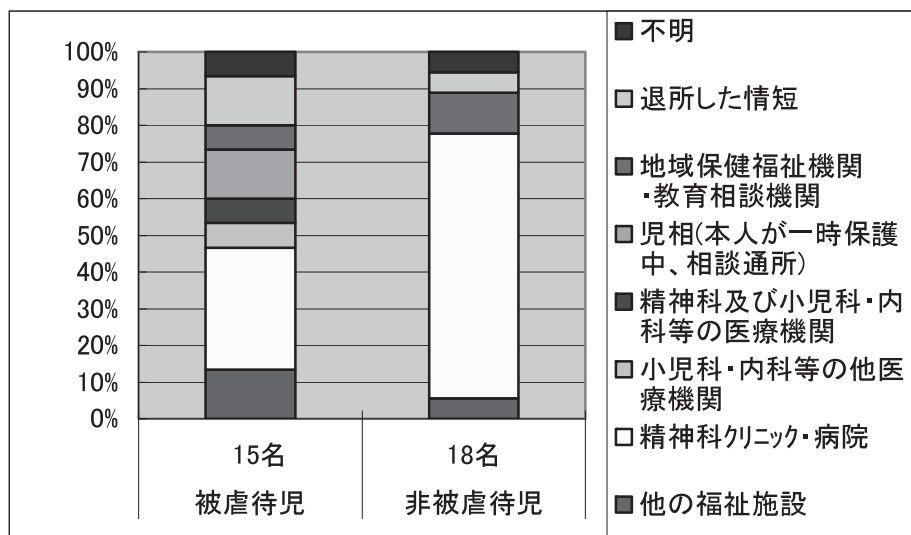


図40 アフターフォロー機関

〔4-2〕施設利用の感想

施設を利用した感想についてまとめた。被虐待児、非被虐待児、男女ともに「良かった」が7割を越えていた（図41，資料3表1-13）。その理由として自由記述欄に記載されたものは次項にまとめた。

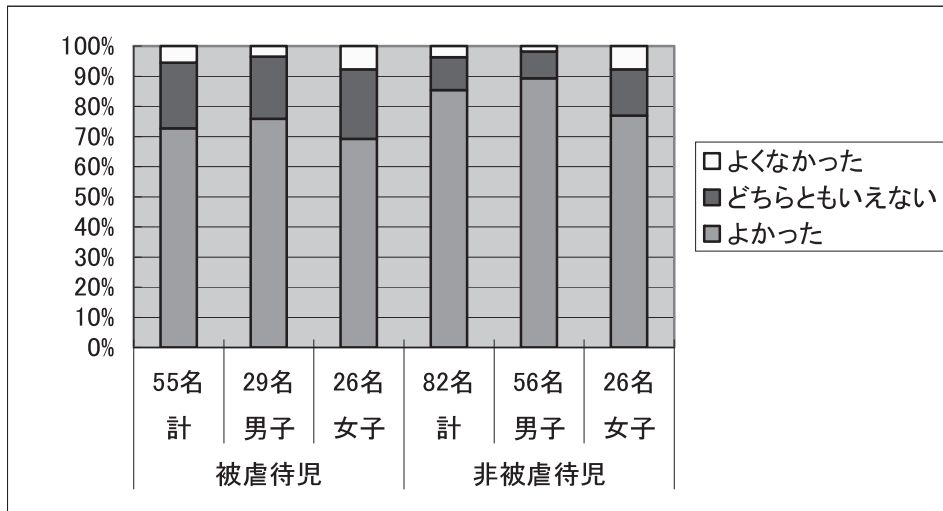


図41 施設利用の感想

5 自由記述

自由記述に書かれたものを設問ごとにまとめた。

〔5-1〕家族と被虐待児・非被虐待児との関係について

（調査A・B Q7「現在のお子さんと親やきょうだいなどの家族との関係」）

調査A（本人・家族記入用）の中で被虐待児・非被虐待児と家族との間で困っていることが無いと回答された中で、自由記載欄に、別居し家族と関わりを持たずにすむので特に困っていることはないという記載が被虐待児で7件、非被虐待児で2件あった。この場合、同居すると様々な問題や衝突があったり児に危険が及ぶ可能性があるためにそれを避けるという理由で別居しているという家族もあった。

家族との問題には、家族側の問題、家族と不仲・疎遠であるという問題、家族に対する児の問題が多かった。家族側の問題には、夫婦の不仲、夫婦どちらかの再婚、DV、生活苦、兄弟の無理解、親の病気や死亡、児の病気への理解の薄さなどがあり、中には父親からの脅迫というものもあった。家族と不仲・疎遠である場合には、トラブルや喧嘩などが原因で母親との関係が悪い場合が多いが、父・妹・継父との関係が悪いというものもあった。関わりがないので分からない、交流・付き合いは殆どないので分からない、という記載も見受けられた。

家族に対する児側の問題では、被虐待児・非被虐待児ともに家族との生活の中で暴力・暴言・問題行動があることが多く、家庭内暴力、注意すると大喧嘩になる、ストレスや疲れを暴言でぶつける、

自己中心的で自分の要求が通らないと物に当たるなどであった。また、被虐待児では家出や家庭外での夜遊び、外泊、喫煙、交友関係の問題を抱えているケースが6件あり、非被虐待児では引きこもりが5件、家族とのコミュニケーション不足が7件記載されていた。

〔5－2〕現在の児童の生活や行動について

（調査A・B Q8「現在のお子さんの生活や行動」）

被虐待児について調査Aで特に多かったのは、生活態度・生活能力の問題であった。未熟で自立心が育っておらず、規則正しく生活することができなかったり、自分自身の今後を計画性を持って考え行動することが出来ないという記載が見られた。

一方、調査Bで多かった記載は順に、就労問題、対人関係や性格の問題、生活態度・生活能力の問題、支えとなる人がいないことであった。就労問題に関しては、調査Bでのみ10件記載され、就職しても続かず辞めてしまう、定職に就かないというものが大部分を占めていた。自宅で家族の調整役を果たそうとする、仕事を紹介しても母親に断られる、退職したままなどの記載もあった。対人関係や性格の問題では、家族・友人・同僚との適切な関係を築くことが出来ないというものが多く、親しくできる人がいないというものもあった。生活態度・生活能力の問題では、逃れてばかりで現実と向き合わない、努力はしているが能力的に不安、人生設計に不安があるというものがあつた。支えとなる人がいないことの詳細は、両親の死亡、家族のサポートが希薄、実母に捨てられたなど、身内で頼りに出来る人がいないというものであつた。

非被虐待児については、調査Aで特に多かったのは、生活能力問題・生活態度であった。生活能力が低いなどの記載だけでなく、時間にルーズな面がある、睡眠時間が安定しない、部屋の掃除をしない、自分で食べるものは自分で作ってほしい、など日常生活に直接結びついたものも多かった。

一方、調査Bで多かったのは支えとなる人がいないという記載と引きこもり・休みがちであるという記載であった。支えになる人がいないという記載の詳細は、家族が病気であつたり障害を持っているので家族に支えてもらえない、親に借金がある、などであった。引きこもり・休みがちであるという記載の詳細は、学校に行けず、生活のリズムが乱れがちである、引きこもっている、自発的な行動に乏しい、などであった。

以上のことから、被虐待児・非被虐待児ともに生活態度・生活能力の問題、就労問題と対人関係の問題を抱えていることが分かる。就労するには生活態度を改め、生活能力を高めていく必要があり、また就労を続けるにはよりよい対人関係を築いていく必要がある。更に規則正しい生活を毎日続けなければならないなど、一度改善した生活態度や生活能力を持続させなければならない、これらの問題は密接に関わっている。どの問題も、解決するには家族などの身内や周囲の頼れる人による支援が必要不可欠である。支えになる人がいないという調査Bでの記載は被虐待児・非被虐待児ともに多く、このことは解決することが出来ない大きな原因になりうる。

また、家族・本人と施設職員の記載内容を比べると違いがみられた。家族に多い記載は日常生活の問題で、施設職員のみに記載された内容は就労問題、医学的問題、虐待問題、支える人の有無で、視

点や把握内容の違いが示唆された。特に、調査Bでは支えがあるので問題なしという記載と支えになる人がいないので心配という記載が多数あったにも関わらず、調査Aではそのような記載は見られなかったことは注目すべきであろう。家族や本人自身には支える人の必要性への配慮や理解がなく、また、支える人がいないことが子どもにとってどのような影響を及ぼすかという視点で子どもを見ていないことが窺われる。

〔5-3〕施設利用感想

調査A Q11「お子さんの近況、今振り返って思われること」をまとめた。

<子どもにとって施設を利用して良かった点>

被虐待児、非被虐待児ともに一番多かったのは、お世話になったという感謝の気持ちが書かれていることであった。7割以上が“施設を利用して良かった”と回答していた(図41)。また、被虐待児、非被虐待児のどちらにも施設を利用できたからこそ今があるとの記載が見られた。被虐待児の中には「もし施設と出会うことがなかったら死んでしまっていたかもしれない」という記載が1件あり、非被虐待児では施設で過ごしたときのことを良い思い出として表現しているものが2件あった。虐待が行われている家庭とその子どもにとって、情短が必要不可欠な時期があったことが推測される。

先生や友人とのふれあいが出来て良かったと記載されているものに関しては被虐待児・非被虐待児ともに、自分の周りに相談できる人がいることの心強さを知ることができ、その人を頼りにして生活する中で成長する事が出来たとの記載が多かった。更に今もその関係が続いているとの記載も見られた。非被虐待児の記載では、集団生活に適應できるようになる中で他人の気持ちを理解し人間関係を築くことを学ぶことが出来て自信が付き、良い思い出になったという記載が多かった。

非被虐待児ではその他、不登校・ひきこもりを克服することが出来たという記載があった。またその後、進学する夢を持つ、高等学校で皆勤賞と全国表彰を貰う、友達がたくさん出来るなど、今後の進路を考える上で前向きである記載が多かった。情短で生活する中で規則正しい生活を送ることが出来るようになり、精神的な安定を保った上で将来について前向きに考える余裕ができたことが良い方向に向かうきっかけとなったと思われる。

<親にとって施設を利用して良かった点>

被虐待児の親に1件、非被虐待児の親に5件の記載があった。「苦しい本音を泣き叫ぶことが出来た」というような記載だけでなく、子どもと接するときに冷静になる練習が出来た、子どもに対する接し方を学べた、息を抜いて付き合えるようになった、今も相談に乗ってもらっている、など親が子どもとどう接したらよいかを学ぶ場を提供することができたと考えられる。

<施設を利用して良くなかった点・施設への要望>

被虐待児・非被虐待児ともに共通する内容が2点あった。

第1点は、情短で過ごしたこと自体を自分の人生の中でマイナスとして捉えているものであった。

2点目は、情短での生活が手厚いため、情短の外に出て生活する場面に遭遇することになったときに対応しきれない、社会での基本的ルールやマナーが身に付いていないということであった。

<近況について>

心身健康状態に関しては、統合失調症や鬱病、その他で受療中と記載されたものや、「自殺」と書かれているものも2件あった。

社会的状態に関しては、予後の良いものの中にいくつか共通した記載があった。職場の同僚ともうまく関わり飲み会に誘われることもある、家を出て会社の寮に入っているが会社の人がよくしてくれる、嫁ぎ先で可愛がられ大事にしてもらっている、などの記載が被虐待児に2件、非被虐待児に3件あり、どれも新しい環境で、気にかけてくれる人との出会いによって支えを得ながら生活しているケースであった。

情短は、職員や友人との関わりや規則正しい生活を通して、精神的な安定を保ち、人を信じることや信頼関係を築く方法を知る場である。情短を出てから自分自身の家族とそのような関係を築くことができればよいが、被虐待児の家族が子どもとの修復を希望しないと記載しているものは3件あり、また被虐待児・非被虐待児とその家族との関係から分かるように、家族と信頼関係を築いた上で頼ることが難しい場合もあるだろう。

従って被虐待児・非被虐待児ともに、情短の外に出て新しい環境で就労したり通学することを継続するには、家族で頼れる人がいない場合は新しい場で支えてくれる人が近くにいることが大きな力になるであろう。

情短在所中に、困ったときに助けを求めることができるようになる経験をし、その力をもとに情短の外の新しい場においても頼れる人を見つけることができるかどうか、退所後の社会適応にとって重要な鍵であると思われる。

IV. 考 察

1 回収率と信頼性

本研究の調査対象の特質から考えて、本人・家族へアンケート調査用紙（調査A）を送付することの可否に慎重な顧慮が求められたうえ、送付したものから果たしてどれだけ回答が戻るかについても危惧が大きかった。回収率が顕著に低い場合、回答からのデータの信頼性が問題になる。それを予想して、本人・家族へのアンケート調査（調査A）に加え、全対象について施設職員へのアンケート調査（調査B）を併せておこない、調査Aでの回収率の低さを補完するとともに両者を比較することで回収されたデータの偏りのいかに検証する方法を選んだ。

結果的には、調査Aでは全対象545名のうち402名に送付、うち136名（送付群の33.8%、送付したうち届いた群の41.9%、全対象の25.0%）から回答が得られた。予想より高い回収率であった。調査Bの回収率は99%だった。

調査Aと調査Bとの項目ごとの比較では生活形態、就労、就学状況など事実に関する事項の一致率はいずれも高く、データに大きな偏りはないと考えることができる。一方、調査Aと調査Bで不一致率が高かった事項は「困ったこと」「心配なこと」など主観的な事項だった。これはその立場（視点）によって違いがでてくる事柄で、個別的な日常生活において問題をとらえる本人・家族と社会的な視点から問題をとらえる職員との視点の差と考えられる。

被虐待と非被虐待に分けて回収率を較べると、被虐待が20%、非被虐待が30%と差がみられる。退所理由別で回収率を較べると、退所理由成長が27%、退所理由中断が18%と両者に大きな開きがみられ、中断事例のフォローの難しさを示している。中断事例は、施設側の力不足や失敗を省みるのも当然ながら、子どもの状態ないし家族のあり方自体に極度の困難性をはらんだものが大半で、本来は最もアフターフォローが求められるべき事例なのである。中断事例のフォローや支援をどうするかは今後の大きな課題である。

退所後のアフターフォロー先によって比較すると、①情短施設でアフターフォローを続けているもの（86人）の無回答率23%、②他機関・他施設でフォローしているもの（38人）の無回答率31%、③アフターフォローがなされていないもの（400人）の無回答率38%と差がみられた。当然といえば当然ながら、アフターフォローが密接であるほど回収率は高くなった。

しかし、回収率の差は、上述の差よりも対象17施設の施設間での差にずっと大きくあらわれた。不送率・不達率も施設間でのばらつきが非常に大きい。調査時点における各施設のおかれた状況や条件、治療体制の差がこの違いをもたらしたと考えられる。ほぼ全員に送付して、しかも50%を越す高い回収率を得ている施設もある。このことは回収率が児童・家族側の要因だけではなく施設側の条件や体制にも大きく左右されることを意味し、それ次第では十分に高い回収率が得られること、言い換えれば入所中のかかわりによって退所後にも信頼のつながりを残せることを示唆している。今後、退所後のアフターケアを考えるうえできわめて重要な知見である。その条件や体制の調査分析が、次の研究課題となろう。

2 結果と考察

調査時点での退所児童の状態を被虐待と非被虐待とで比較すると、被虐待のケースのほうが「施設入所」「家族との問題」「低学歴（中卒）」の割合が高かったが、それ以外で全体的にみれば大きな差はみられなかった。男女を比較すると、男子のほうが社会的な自立が困難であることがわかる。

以下、項目別に見てゆく。

(1) 居住形態

調査時点で家族と同居しているのが非被虐待では7割、被虐待でも4割となっており、施設ケアによって家庭復帰が可能となるケースが少なくないことがわかる。退所時点から家庭に戻っている被虐待ケースだけでみると、その5割は家族との同居が続いている。「家族再統合」の機能を施設ケアは一定程度、果たしていると言える。

他方、退所時点から家庭に戻ったケースのうち2割が施設再入所となっており、家族との生活がやはり困難であった事例も存在する。両者をどう判別するかと家庭復帰後のアフターフォローとが今後の課題であろう。

自由記述からみると、同居の場合も関係がすっかり良好に改善しているというよりも、葛藤やトラブルも抱えつつ、それなりに共同生活が維持されているかたちでの再統合が多い。同居していても互いに距離を取っているとか、敢えて同居を避けて別居を選ぶなど無理に再統合を図らないことで安定を守るというあり方も見られる。

なお、調査票を送付した402名のうちの78名（14%）が居所不明で届かなかった。転居の繰り返しなど居住そのものが不安定なケースの存在も示唆される。

(2) 進学

高校を卒業後の大学・専修学校等への進学率（63.2%）は、児童養護施設（20.5%）に比べて高く、一般の進学率（74.3%）をやや下回る程度であった。このことは、高校を卒業することが出来た児童においては全国の高卒後進学率をやや下回る程度で大学進学していたことを示している。しかし、19歳以上の全体を見ると、最終学歴が大学・専修学校等の割合は、27.8%に過ぎない。最終学歴が中卒にとどまる者が被虐待15.6%（非被虐待では5.4%）と被虐待群の学歴の低さが著しい。また全日制、定時制、通信制高校中退者が25.0%（非被虐待では16.8%）であり、それらを併せてみると、被虐待児の28.2%（非被虐待児20.0%）が学校教育の場から早期に脱落していた。また養護学校に籍を置いた被虐待児も24.6%（非被虐待児16.9%）おり、全国統計の1.13%と比較すると、情短退所児、特に被虐待児における知的発達の遅れあるいは知的障害を有する率は著しく高い。情短退所児（特に被虐待児）の知的能力、学力、学校生活上のハンディの大きさが明らかとなった。

学歴がすべてを語るわけではないとしても、この数字は被虐待児の強いられる社会生活上のハンディの大きさを示唆しており、この解決が重要な課題となる。このハンディをもたらしリスクファクターをアセスメントした結果は以下のとおりである。

最終学歴中卒者は、虐待種別でみると、ネグレクト群や親に被虐待歴のある群に多かった。また退所時期でみると、14歳以前に退所した群が多くを占めていた。退所先でみると、児童自立支援施設やグループホームが退所後の行き先となった群が多くみられた。親の被虐待歴や退所先から判断すれば、家族状況に問題が深いため家庭復帰ができなかった事例、非行的な行動が激しく児童自立支援施設への施設変更を要した事例など困難性・問題性がとりわけ大きかったケースが、中卒群の一つのグループをなしていると考えられる。

もうひとつ考えねばならないのは、14歳以前に退所した群とネグレクト群に中卒群が多い問題である。身体的虐待がみられない場合、直接の生命危機がないため、児童がそれなりに力を伸ばした段階で比較的早期の家庭復帰が選ばれ、それが14歳以前の退所をもたらしている可能性がある。しかし、ネグレクト家庭には子どもの高校進学を支援しておし進めるだけの力がないため、そのまま中卒で終わってしまうリスクが大きく、これが中卒群のもう一つのグループを生み出していると考えられる。これは大きな問題で、中学卒業以前での家庭復帰には、家庭状況の十分な見極めと退所後のアフターフォローが不可欠なことが示唆される。

最終学歴が高校中退群では、被虐待と非被虐待との間に顕著な差が見られる。高校中退群においても、被虐待との関連性が大きくなっていると言える。高校中退群を退所時点での問題の有無でみると、「社会ルール」「自己評価」「認知能力（学力）」「問題行動」の項目に問題性がみられた児童が有意に多かった。学校生活を継続するのに必要な諸力がよく育っていないために中退に至ることが示唆される。これらの力をいかに育むか、また高校進学後のフォローをいかに続けるかが重要な課題となる。

被虐待児の大学等への進学者率は27.8%と低いが、そのなかで進学できた群をみると、退所時点での問題の有無で「対子供行動」「社会ルール」「問題行動」で問題なしの群において進学率が有意に高かった。社会性の獲得が重要なことが示唆される。これに対して、非被虐待児の場合は「認知能力（学力）」の如何が進学率に有意差をもたらしている。

(3) 就 労

16～18歳の年齢層で就職・進学率を比較すると、被虐待47.4%、非被虐待41.7%、19歳以上で比較すると被虐待64.4%、非被虐待59.2%で、いずれも有意差はなかった。男女で比較すると被虐待児では有意な男女差がみられ、男子のニート率（10.4%）が女子（3.4%）に較べて高い。非被虐待児のニート率は男子10.4%、女子7.3%である。ニート群は最終学歴が中卒および高校中退の群に多かった。

就職率およびニート率と入所前のリスクアセスメントとの相関をみると、子どもへの否定的な感情態度や虐待への無自覚など養育者の問題が大きかった群が問題のなかった群に比してニート率が有意に高く、経済問題のあった群が経済問題がなかった群に比して就職率が有意に高い。

他方、退所時の問題との相関をみると、「特定の大人や子供との関係」「自己評価」に問題のある群や医療を要する群がそれがない群に比してニート率が高く、これに対して「大人への態度」に問題ない群、医療を要さない群がそうでない群に比して就職率が有意に高い。また「食欲」に問題ありの群の就職率は、問題のない群に較べて有意に低かった。これは拒食・過食など摂食障害との関連とみ

られる。就職後の出勤状態を学歴別にみると、中卒群が他群と較べて「よく休む」が多く、就労不安定な者の割合が他群よりも高いことがわかる。

以上をまとめると退所後の安定した就職就労には、①高卒以上の学歴、②養育者の問題が極端に大きくないこと、③大人との関係が作れるようになっていること、④それなりの自己評価がもてていること、⑤医療的な問題が少ないこと、が大事な要件になると考えられる。経済問題がある群のほうが就職率が高いのは、それだけ必要に迫られるせいであろう（パラサイトが不可能）。上述のうち①は進学問題でもあり、あらためて14歳以前の退所をよく検討して慎重に取り組むことの必要性を示している。

（４）結婚と挙子

回答の得られた退所児童のうち17名が結婚（全員が女子）、そのうち2名が離婚を経験していた。結婚した17名のうち13名が子どもをもっていた。結婚者率（14.7%）は同じ年齢層の全国データ（5.2%）より高く、離婚者率（2.0%）も全国データ（0.3%）より高い。挙子率（76.5%）は全国データ（62.4%）より若干高いが有意差はない。

社会一般で晩婚化が進むなかで、むしろ早い結婚に向かうところに、この子どもたちが強いられた家庭生活の困難の姿が仄見える。

（５）心身健康状態

被虐待、非被虐待ともに現在の元気さについては「元気」「まあまあ元気」の回答がほとんどで大きな問題はなかった。学校や仕事の出欠も、被虐待、非被虐待ともに8割以上が「ほとんど休まない」の回答で、上の結果と一致している。

他方、現在も治療機関や相談機関へ通っているという回答が被虐待、非被虐待ともに2割を大きく超えており、そこでのケアに支えられての「元気」というケースも少なくないと考えられる。

（６）家族関係

現在の家族関係では「特に困ったことはない」の回答が被虐待では46.9%、非被虐待では63.3%。「困ることがよくある」の回答が被虐待で22.9%、非被虐待で10%。かなり良好と言える。ただ、居住の項目で検討したようにトラブルにもぶつかりつつもそこそこに収めたり、家族間の距離をとったりすることで大きく困らない努力がなされている面が、この数字の背後にはあるだろう。

困ることがよくある群は、退所時点で、「大人に対する態度および行動」「子どもに対する行動」「社会ルール」に問題ありだったグループ、医療を要していたグループに多い。退所時に対人関係や社会性にまだ問題を抱えていた者は、その後も家族関係で問題にぶつかる割合が高くなるのだろう。

（７）生活・行動

現在の生活・行動でも「特に心配がない」「なんとか大丈夫」の回答が被虐待で72.3%、非被虐待で

77.4%。「なにかと心配」の回答がそれぞれ27.1%、22.6%で、おおむね良好と言える。

なにかと心配群は、退所時点で「大人に対する態度」「子どもに対する行動」「社会ルール」「自己評価」に問題ありだったグループ、「問題行動」があったグループ、医療を要していたグループに多い。退所時に残っていた生活上・行動上の問題が、その後も改善しなかったり悪化したりしたものが、この群には多いと考えられる。

自由記述にみる「心配」の内容には特徴がある。調査Bの施設職員からの記述では、子どもにとって支えとなる者がいないことへの危惧が多く述べられている。これに対して調査Aの家族からの記述では、生活態度・生活能力の未熟さへの危惧が多く語られていても、支えのなさへの言及はみられなかった。被虐待ケースでは家族そのものが社会的に孤立を強いられやすく、まわりとの協力やまわりの支えによって問題を解決するという経験や発想を家族自身をもってこなかった場合が多い。そのため、わが子の未熟さを親として心配したとき、それを親自身も含むだれかの支えによって少しずつ伸ばす発想に欠き、いたずらな危惧だけに終わったり、つい叱りつけてしまう方向に傾きやすいだろう。家族を孤立させないこと、家族自身がまわりに支えられる体験をもてるような関わりを続けることが被虐待ケースのケアには不可欠であろう。

(8) 自殺と病気

本調査では、対象560名(11~25歳)のうち3名が自殺していた。内訳では被虐待児2名、非被虐待児1名、性別では男子2名、女子1名だった。自殺率0.54%で、一般人口の同じ年齢階層の自殺率よりもずっと高い。

統合失調症や鬱病の診断で現在受療中という自由記述での回答もあり、被虐待と精神疾患とのつながりや医療との連携の問題も、今後、調査検討すべき大きなテーマであろう。情短入所児童には医療を要するケースが多いが、その内容の詳しい解析も今後の課題である。

(9) 退所後の期間

「元気」という回答の比率(元気率)、家族関係で「困ることがよくある」という回答の比率(家族関係不調率)、生活・行動で「なにかと心配」という回答の比率(生活行動問題率)、登校や出勤を休む比率(欠席率)を、それぞれ退所後の年数別に追ってみると、退所後年数が経つにつれて元気率は上がり、家族関係不調率、生活行動問題率、欠席率は下がっている。つまり、年数とともに全体的に改善している。

改善の仕方をみると、元気率は退所後2年、3年が相対的に低く、4年目に入って高いところで安定する。家族関係不調率、生活行動問題率は退所後2年以内の群が最も高く、5年群が最も低くなっている。欠席率も2年以内群が高く、5年群になると大きく下がっている。

退所して最初の2年間は適応のための試行錯誤期間でまだ問題も多く、それを越えられたとき、ぐっと安定に向かうと考えられる。長期予後を考えるなら、退所して最初の2年間で大事にアフターフォローすることがきわめて重要である。

(10) 利用者からの評価

施設を利用してどうだったかの設問には、被虐待ケースからは「よかった」が72.2%、「よくなかった」が5.5%、非被虐待ケースからは「よかった」が85.4%、「よくなかった」が3.7%で、少なくとも回答の得られたかぎりでは施設ケアへの肯定的な評価が大多数であった。

日々、入所児童のケアに追われ続ける現場スタッフの労働実感としては、その困難感・消耗感のほう達成感・満足感よりもずっと大きく体験されているにちがいない。入所児童にも施設の集団生活は決してパラダイスではなく、児童福祉施設の最低基準が改善されていないことからわかるとおり、とうてい十分といえない生活条件のなかで、一般の子どもたちに較べてずっと制約された暮らしを余儀なくされている。スタッフばかりでなく、入所児童も困難感やストレスを強いられるのである。

しかしそれにもかかわらず、退所後にその生活を顧みて「よかった」との回答が多く寄せられた事実は、困難感・消耗感を強いられつつのスタッフの努力が実はどこかで実を結んでいること、情短での施設ケアが治療性をもっていることのあらわれと見ることができる。同時にまた、入所以前の生活状況が児童にとっていかに過酷なものであったかを示すものかもしれない。

自由記述の感想のなかに「よかった」とする理由が語られており、それらを整理すると、①施設に保護されたこと自体（「施設と出会うことがなかったら死んでしまっていたかもしれない」、②人に相談したり頼ったりしながら生きる体験がもてたこと、③他人を理解し人間関係を作ることが学べたこと、④前向きの見通しがもてるようになったこと、等が大きな理由となっている。子どもたちの側からみて施設ケアになにが求められているか、深く示唆するものであろう。

他方、「よくなかった」理由として、①施設に入所していたこと自体がスティグマ（人生の汚点）と信じられること、②施設の保護的・治療的な空気の中で生活してきたため、実社会の風圧への対処力や世間的なルールやマナーがよく身に付いていなかったこと、の2点が語られている。

①には、社会的な偏見差別の問題と自己評価・自己価値感の低さの問題とが重なり合っている。一般家庭と大きなギャップを抱えた施設の生活条件の低さが、そこに生活する児童の自尊感情や自己価値感を育みにくくしているという問題が潜む。②は、治療施設として保護的な治療性を土台とする情短施設に社会に出てからの現実能力を養成する機能をいかに併せもたせるかという今後の課題を指し示している。

3 むすび

情短施設退所後の予後調査の分析結果は以上のとおりである。全体を統計的に分析してみると、退所後の家族再統合、児童の生活や行動の安定、進学・就労など社会参加において施設ケアは有効な役割を果たしていると見ることができる。

それとともに幾つかの重要な今後の治療課題や研究課題がはっきり浮かんできた。それを列記する。

①14歳以前（中学卒業前）に退所した児童にその後の進学・就労など困難が大きい傾向が有意にみ

られた。入所ケアの継続（あるいは退所後のしっかりしたアフターケア）によって中卒（高校進学）まで見届けることが大切な治療課題である。

- ②退所後のフォロー、特に退所後2年間のアフターフォローが重要な治療課題である。
- ③中断事例の中断後のフォローをどうするかがほとんど手つかずの課題として残されている。
- ④医療を要する児童が多数あり、それと退所後の予後との関連が大きい。医療との連携のあり方、および医療ケアを要する児童の具体的な調査が今後の研究課題である。
- ⑤「最終学歴が中卒群」「ニート率の高い群」「生活・行動になにかと心配群」に共通した特徴として、退所時に「自己評価」に問題ありとされたグループの割合が高いことがわかった。自分なりの自己評価や自尊感情が育っているか否かが退所後の社会適応に深く関連している。攻撃性、衝動性など外に問題行動として現れるものの改善はおのずと治療目標とされるし、それらの改善度が退所の指標とされやすい。しかし、自己評価、自尊感情のような内的なものをいかに育くむかが長期的な予後を考えると大切な治療課題である。
- ⑥保護や治療を施設ケアの土台としつつ、実生活を生きぬくための対処力をどう育てゆくか。その工夫も情短施設の今後の課題である。
- ⑦回収率の施設間の差が大きく、施設のもつ条件や治療体制によって退所後の児童・家族とのつながりに濃淡が現れることが示唆された。どのような条件や体制がそれに関連するのか、アフターフォローを考えるうえで重要な研究課題である。

謝 辞

まずはじめに、今回の調査にご協力いただいた退所児童の皆さんとご家族の方々に厚く御礼申し上げます。

また、被虐待児の入所は増加する一方で、その業務困難のさなかを手間の掛かる質問紙調査に労を惜しまず協力してくださった各施設、調査への全面的なバックアップをくださった全国情緒障害児短期治療施設協議会に深く感謝します。

<引用・参考文献>

- 大角義之（1994） ならわ学園予後調査－状況と結果－. 心理治療と治療教育－情緒障害児短期治療施設研究紀要－第5号. p59-69.
- 大塚隆治他（1993） 京都市青葉寮中学生退寮児追跡調査. 心理治療と治療教育－情緒障害児短期治療施設研究紀要－ 第7号. p 111-117.
- 加藤曜子（2000） 重要度判断と危険度について. 子どもの虐待とネグレクト vol.2 no.1. p 79-86.
- 国立精神・神経センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター（2006） 自殺予防統計：地域での自殺予防対策のために.
<http://www.ncnp.go.jp/ikiru-hp/genjo/toukei/index.html>
- 全国児童養護施設協議会調査研究部（2006） 児童養護施設における子どもたちの自立支援の充実に向けて：平成17年度児童養護施設入所児童の進路に関する調査報告書.
- 滝川一廣他（2001） 児童虐待に対する情緒障害児短期治療施設の有効利用に関する調査研究. 恩師財団母子愛育会平成12年度児童環境作り等の総合調査研究事業報告書.
- 滝川一廣他（2005） 児童虐待に対する情緒障害児短期治療施設の有効活用に関する縦断的研究－2000年から2004年に亘る縦断研究の報告. 子どもの虹情報研修センター平成16年度研究報告書.
- 総務省統計局（2000） 平成12年度国勢調査. 調査の結果.
<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/index.htm>
- 総務省統計局（2005） 平成17年度国勢調査. 調査の結果.
<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/index.htm>
- 間々田孝夫・西村雄郎（1986） 郵送調査の可能性. 『現代社会学』21号. p120-145.
- 文部科学省（2000） 公・私立高等学校における中途退学者数の状況調査.
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index30.htm（以下同）
- 文部科学省（2001） 公・私立高等学校における中途退学者数の状況調査.
- 文部科学省（2002） 公・私立高等学校における中途退学者数の状況調査.
- 文部科学省（2003） 公・私立高等学校における中途退学者数の状況調査.
- 文部科学省（2004） 公・私立高等学校における中途退学者数の状況調査.
- 文部科学省（2005a） 平成17年度学校基本調査.
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/05122201/index.htm
- 文部科学省（2005b） 公・私立高等学校における中途退学者数の状況調査.
- 山本昭二郎他（1982） 退所児童87名の予後研究. 大阪市児童院30周年記念誌 心をはぐくむ－子どもと家族とともに30年－. 大阪市児童院.

5 お子さんの仕事についてお伺いします

- ① 会社・お店などに就職
- ② 自営
- ③ パート・アルバイト
- ④ 専業主婦
- ⑤ 家事手伝い
- ⑥ 無職
- ⑦ その他（ ）

6 学校あるいは仕事は

- ① ほとんど休まない
- ② ときどき休む
- ③ よく休む

7 現在お子さんと親や兄弟などの家族との間は

- ① 特に困ったことは無い
- ② 時々困ることがある
- ③ 困ることがよくある

もしよろしければ、具体的にお書きください

8 現在のお子さんの生活や行動は

- ① 特に心配なことはない
- ② 心配なことはあるが、何とか大丈夫と思える
- ③ 何かと心配である

もしよろしければ、具体的にお書きください

9 現在お子さんは治療機関・相談機関などに通っていますか

- ① 通っている（そこはどこですか ）
- ② 通っていない

次ページに続く

10 私たちの施設を利用してどうでしたか

- ① よかった
- ② どちらともいえない
- ③ よくなかった

11 お子さんの近況、今振り返って思われることなどを自由にお書きください

アンケートにご協力ありがとうございました。
施設では退園された方のご相談もお受けしております。
何かの折にはご利用ください。

3 児童は

- ①未婚
- ②結婚している（子どもは いる いない）
- ③不明

4 学校についてお伺いします。当てはまるところに ○ を付けてください。

- ①小学校に在籍
- ②中学校に在籍
- ③高等学校（イ全日制 □定時制 ハ通信制 ニ不明）
（イ在籍 □退学 ハ卒業 ニ不明）
- ④養護学校（イ在籍 □退学 ハ卒業 ニ不明）
- ⑤専門学校（イ在籍 □退学 ハ卒業 ニ不明）
- ⑥短大・大学（イ在籍 □退学 ハ卒業 ニ不明）
- ⑦予備校に在籍
- ⑧その他（ ）
- ⑨不明

5 児童の仕事についてお伺いします

- ①会社・お店などに就職
- ②自営
- ③パート・アルバイト
- ④専業主婦
- ⑤家事手伝い
- ⑥無職
- ⑦その他（ ）
- ⑧不明

6 学校あるいは仕事は

- ①ほとんど休まない
- ②ときどき休む
- ③よく休む
- ④不明

7 現在、児童と親や兄弟などの家族との間は

- ①特に困ったことは無い
- ②時々困ることがある
- ③困ることがよくある
- ④不明

次ページに続く

資料3 基礎調査結果

表1-1 B アンケートAの送付・回収状況

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
返事有り	57	20.3	31	19.1	26	21.8	79	29.9	54	32.0	25	26.3
届かず戻る	40	14.2	30	18.5	10	8.4	38	14.4	26	15.4	12	12.6
発送せず	88	31.3	42	25.9	46	38.7	55	20.8	35	20.7	20	21.1
返信無し	96	34.2	59	36.4	37	31.1	92	34.8	54	32.0	38	40.0

男女差 被虐待児 $p=0.026$

表1-2 調査Aの回答者

	調査A					
	計		被虐待児		非被虐待児	
	名	%	名	%	名	%
計	143	100.0	59	100.0	84	100.0
本人	38	26.6	22	37.3	16	19.0
父母	85	59.4	25	42.4	60	71.4
その他						
本人と祖母	1	0.7	1	1.7	0	0.0
祖父母	10	7.0	5	8.5	5	6.0
おじおば	1	0.7	1	1.7	0	0.0
職員	7	4.9	5	8.5	2	2.4
きょうだい	1	0.7	0	0.0	1	1.2

表1-3 B1 現在、児童は元気でしょうか

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
元気	108	70.6	53	70.7	55	70.5	94	72.9	61	73.5	33	71.7
まあまあ元気	44	28.8	22	29.3	22	28.2	34	26.4	22	26.5	12	26.1
悪い	1	0.7	0	0.0	1	1.3	1	0.8	0	0.0	1	2.2
不明	128	-	87	-	41	-	135	-	86	-	49	-

表1-4 B2 現在、児童と家族は一緒に暮らしていますか

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
家族と一緒に	67	38.7	37	41.6	30	35.7	97	65.5	62	67.4	35	62.5
親戚の家	4	2.3	1	1.1	3	3.6	1	0.7	0	0.0	1	1.8
学校・会社の寮	9	5.2	5	5.6	4	4.8	11	7.4	8	8.7	3	5.4
知人と	7	2.5	3	3.4	4	4.8	4	2.7	1	1.1	3	5.4
結婚して別所帯	7	4.0	0	0.0	7	8.3	6	4.1	0	0.0	6	10.7
同棲	3	1.7	0	0.0	3	3.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0
一人暮らし	16	9.2	6	6.7	10	11.9	14	9.5	10	10.9	4	7.1
施設に入所	60	34.7	37	41.6	23	27.4	15	10.1	11	12.0	4	7.1
不明	108	-	73	-	35	-	116	-	77	-	39	-

被虐待児: 非 $p < 0.001$

男女差 被虐待児 $p = 0.024$ 非被虐待児 $p = 0.015$

表1-5 A3およびB3を統合 児童の婚姻

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
未婚	184	95.3	101	100.0	83	90.2	162	95.3	109	100.0	53	86.9
結婚	7	3.6	0	0.0	7	7.6	8	4.7	0	0.0	8	13.1
離婚	2	1.0	0	0.0	2	2.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
不明	88	-	61	-	27	-	94	-	60	-	34	-

男女差 被虐待児 $p = 0.006$ 非被虐待児 $p < 0.001$

表1-6 A4およびB4とその他の記載を参照して統合 最終学歴

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
中学校在籍	44	22.6	27	26.0	17	18.7	7	3.7	7	5.6	0	0.0
中学校卒業	23	11.8	14	13.5	9	9.9	10	5.2	6	4.8	4	6.2
中学校卒業不明	2	1.0	1	1.0	1	1.1	1	0.5	1	0.8	0	0.0
高校進学	35	17.9	22	21.2	13	14.3	45	23.6	28	22.2	17	26.2
高校退学	20	10.3	14	13.5	6	6.6	21	11.0	13	10.3	8	12.3
高校卒業	13	6.7	4	3.8	9	9.9	26	13.6	11	8.7	15	23.1
高校卒業不明	1	0.5	0	0.0	1	1.1	1	0.5	0	0.0	1	1.5
大学	24	12.3	5	4.8	19	20.9	47	24.6	36	28.6	11	16.9
養護学校中等部在学	2	1.0	0	0.0	2	2.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
養護学校中等部卒業	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.5	1	0.8	0	0.0
養護学校高等部進学	14	7.2	9	8.7	5	5.5	9	4.7	8	6.3	1	1.5
養護学校高等部退学	1	0.5	1	1.0	0	0.0	1	0.5	1	0.8	0	0.0
養護学校高等部卒業	16	8.2	7	6.7	9	9.9	22	11.5	14	11.1	8	12.3
不明	86	-	58	-	28	-	73	-	43	-	30	-

被虐待児: 非 $p < 0.001$

男女差 被虐待児 $p = 0.015$ 非被虐待児 $p = 0.067$

表1-7 A4、5およびB4、5を統合 現在の就学または就労

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
在学	93	47.7	52	49.1	41	46.1	57	35.4	40	37.7	17	30.9
浪人	2	1.0	1	0.9	1	1.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
就職	58	29.7	30	28.3	28	31.5	66	41.0	43	40.6	23	41.8
就職準備	4	2.1	1	0.9	3	3.4	2	1.2	2	1.9	0	0.0
作業所	5	2.6	4	3.8	1	1.1	4	2.5	2	1.9	2	3.6
主婦・家事手伝い	10	5.1	1	0.9	9	10.1	10	6.2	4	3.8	6	10.9
ニート	14	7.2	11	10.4	3	3.4	15	9.3	11	10.4	4	7.3
職歴あり現在不明	7	3.6	4	3.8	3	3.4	6	3.7	4	3.8	2	3.6
他界	2	1.0	2	1.9	0	0.0	1	0.6	0	0.0	1	1.8
不明	86	-	56	-	30	-	103	-	63	-	40	-

男女差 被虐待児 $p = 0.043$

表1-8 B6 学校あるいは仕事は

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
ほとんど休まない	77	81.9	40	80.0	37	84.1	77	85.6	53	88.3	24	80.0
ときどき休む	12	12.8	7	14.0	5	11.4	7	7.8	3	5.0	4	13.3
よく休む	5	5.3	3	6.0	2	4.5	6	6.7	4	6.7	2	6.7
不明	187	-	112	-	75	-	174	-	109	-	65	-

男女差 非被虐待児 p=0.037

表1-9 B7 現在、児童と親や兄弟などの家族との間は

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
特に困ったことはない	45	46.9	20	45.5	25	48.1	57	63.3	43	68.3	14	51.9
時々困ることがある	29	30.2	15	34.1	14	26.9	24	26.7	17	27.0	7	25.9
困ることがよくある	22	22.9	9	20.5	13	25.0	9	10.0	3	4.8	6	22.2
不明	185	-	118	-	67	-	174	-	106	-	68	-

被虐待児: 非 p=0.028

表1-10 B8 現在の児童の生活や行動は

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
特に心配なことはない	39	27.1	19	27.9	20	26.3	49	39.5	36	42.9	13	32.5
何とか大丈夫	66	45.8	26	38.2	40	52.6	47	37.9	32	38.1	15	37.5
何かと心配	39	27.1	23	33.8	16	21.1	28	22.6	16	19.0	12	30.0
不明	137	-	94	-	43	-	140	-	85	-	55	-

表1-11 A9 現在お子さんは治療機関・相談機関などに通っていますか

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
通っている	15	26.8	8	26.7	7	26.9	18	22.8	12	22.2	6	24.0
通っていない	41	73.2	22	73.3	19	73.1	61	77.2	42	77.8	19	76.0
不明	225	-	132	-	93	-	185	-	115	-	70	-

表1-12 B9 児童のアフターフォローについてお伺いします

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
施設でフォローしている	46	16.9	24	15.5	22	18.8	40	15.7	26	15.9	14	15.4
施設及び他機関通所	2	0.7	2	1.3	0	0.0	1	0.4	1	0.6	0	0.0
他機関に通っている	19	7.0	14	9.0	5	4.3	19	7.5	13	7.9	6	6.6
フォローは行っていない	205	75.4	115	74.2	90	76.9	195	76.5	124	75.6	71	78.0
不明	9	-	7	-	2	-	9	-	5	-	4	-

表1-13 A10 私たちの施設を利用してどうでしたか

	被虐待児						非被虐待児					
	計		男子		女子		計		男子		女子	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	281	100.0	162	100.0	119	100.0	264	100.0	169	100.0	95	100.0
よかった	40	72.7	22	75.9	18	69.2	70	85.4	50	89.3	20	76.9
どちらともいえない	12	21.8	6	20.7	6	23.1	9	11.0	5	8.9	4	15.4
よくなかった	3	5.5	1	3.4	2	7.7	3	3.7	1	1.8	2	7.7
不明	226	-	133	-	93	-	182	-	113	-	69	-

資料4 調査A・調査Bの調査結果

※一方の調査のみの設問の結果は資料3に収録

表2-1 A1 お子さんはお元気ですか
B1 現在、児童は元気でしょうか

	調査A						調査B					
	計		被虐待児		非被虐待児		計		被虐待児		非被虐待児	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	143	100.0	59	100.0	84	100.0	545	100.0	281	100.0	264	100.0
元気	102	75.0	38	71.7	64	77.1	202	71.6	108	70.6	94	72.9
まあまあ元気	34	25.0	15	28.3	19	22.9	78	27.7	44	28.8	34	26.4
悪い	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	0.7	1	0.7	1	0.8
不明	7	-	6	-	1	-	263	-	128	-	135	-

表2-2 A2 現在お子さんとご家族は一緒にお暮らしですか
B2 現在、児童と家族は一緒に暮らしていますか

	調査A						調査B					
	計		被虐待児		非被虐待児		計		被虐待児		非被虐待児	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	143	100.0	59	100.0	84	100.0	545	100.0	281	100.0	264	100.0
家族と一緒に	84	59.6	26	44.8	58	69.9	164	51.1	67	38.7	97	65.5
他方の親と	2	1.4			2	2.4						
親戚の家	4	2.8	3	5.2	1	1.2	5	1.6	4	2.3	1	0.7
学校・会社の寮	12	8.5	6	10.3	6	7.2	20	6.2	9	5.2	11	7.4
知人と	3	2.1	2	3.4	1	1.2	11	3.4	7	4.0	4	2.7
結婚して別所帯	3	2.1	1	1.7	2	2.4	13	4.0	7	4.0	6	4.1
同棲							3	0.9	3	1.7		
一人暮らし	16	11.3	7	12.1	9	10.8	30	9.3	16	9.2	14	9.5
施設に入所	17	12.1	13	22.4	4	4.8	75	23.4	60	34.7	15	10.1
不明	2	-	1	-	1	-	224	-	108	-	116	-

表2-3 A2⑥ 入所している施設の種類
B2⑥ 入所している施設の種類

	調査A						調査B					
	計		被虐待児		非被虐待児		計		被虐待児		非被虐待児	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	17	100.0	13	100.0	4	100.0	75	100.0	60	100.0	15	100.0
児童養護施設	8	47.1	7	53.8	1	25.0	32	42.7	26	43.3	6	40.0
児童自立支援施設	0	0.0	0	0.0	0	0.0	7	9.3	5	8.3	2	13.3
知的障害児施設／ 知的障害者関連施設	4	23.5	3	23.1	1	25.0	12	16.0	9	15.0	3	20.0
養育里親・里親	1	5.9	1	7.7	0	0.0	3	4.0	2	3.3	1	6.7
当施設以外の情短	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.3	1	1.7	0	0.0
一時保護中	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	4.0	3	5.0	0	0.0
(精神科)入院中	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.7	2	3.3	0	0.0
グループホーム(知的障害者施設・児童養護施設)	1	5.9	1	7.7	0	0.0	5	6.7	5	8.3	0	0.0
自立援助ホーム(児童自立生活援助事業)	1	5.9	1	7.7	0	0.0	2	2.7	1	1.7	1	6.7
援護寮・自立支援ホーム(精神障害者生活訓練施設)	1	5.9	0	0.0	1	25.0	3	4.0	1	1.7	2	13.3
少年院・少年刑務所	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.7	2	3.3	0	0.0
不明	1	5.9	0	0.0	1	25.0	3	4.0	3	5.0	0	0.0

表2-4 A3 お子さんは
B3 児童は

	調査A						調査B					
	計		被虐待児		非被虐待児		計		被虐待児		非被虐待児	
	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%	名	%
計	143	100.0	59	100.0	84	100.0	545	100.0	281	100.0	264	100.0
未婚	136	97.1	57	96.6	79	78.6	326	95.3	175	95.1	151	95.6
結婚している	3	2.1	1	1.7	2	15.7	15	4.4	8	4.3	7	4.4
離婚・調停中	1	0.7	1	1.7	0	5.7	1	0.3	1	0.5	0	0.0
不明	3	-	0	-	3	-	203	-	97	-	106	-

表2-5 A3② お子さんが結婚している場合、子どもは
B3② 児童が結婚している場合、子どもは

	調査A			調査B		
	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %
計	4 100.0	2 100.0	2 100.0	16 100.0	9 100.0	7 100.0
子どもがいる	3 75.0	1 50.0	2 100.0	11 84.6	6 75.0	5 100.0
いない	1 25.0	1 50.0	0 0.0	2 15.4	2 25.0	0 0.0
不明	0 -	0 -	0 -	3 -	1 -	2 -

表2-6 A4 学校についてお伺いします。
B4 学校についてお伺いします。

	調査A			調査B		
	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %
計	143 100.0	59 100.0	84 100.0	545 100.0	281 100.0	264 100.0
小学校在籍				1 0.3		1 0.6
中学校在籍	9 8.7	8 17.8	1 1.7	72 20.9	59 33.1	13 7.8
高校在籍・退学・卒業	45 43.7	15 33.3	30 51.7	142 41.3	63 35.4	79 47.6
養護学校在・退・卒	17 16.5	9 20.0	8 13.8	63 18.3	32 18.0	31 18.7
専門学校在・退・卒	15 14.6	4 8.9	11 19.0	30 8.7	9 5.1	21 12.7
短・大学在・退・卒	14 13.6	6 13.3	8 13.8	26 7.6	12 6.7	14 8.4
予備校在籍				1 0.3		1 0.6
訓練校・施設	2 1.9	2 4.4		6 1.7	2 1.1	4 2.4
不登校	1 1.0	1 2.2		3 0.9	1 0.6	2 1.2
不明	40 -	14 -	26 -	201 -	103 -	98 -

表2-7 A5 お子さんの仕事についてお伺いします。
B5 児童の仕事についてお伺いします。

	調査A			調査B		
	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %
計	143 100.0	59 100.0	84 100.0	545 100.0	281 100.0	264 100.0
会社・店などに就職	31 27.4	14 33.3	17 23.9	60 28.6	28 27.7	32 29.4
パート・アルバイト	37 32.7	9 21.4	28 39.4	65 31.0	24 23.8	41 37.6
自営	2 1.8		2 2.8	1 0.5		1 0.9
授産施設・就労支援センター	4 3.5	2 4.8	2 2.8	8 3.8	3 3.0	5 4.6
専業主婦	4 3.5	1 2.4	3 4.2	7 3.3	3 3.0	4 3.7
家事手伝い	2 1.8	2 4.8		5 2.4	4 4.0	1 0.9
無職	22 19.5	4 9.5	18 25.4	39 18.6	24 23.8	15 13.8
該当外(小中学生)	3 2.7	3 7.1		12 5.7	8 7.9	4 3.7
該当外(高専大在)	8 7.1	7 16.7	1 1.4	13 6.2	7 6.9	6 5.5
不明	30 -	17 -	13 -	335 -	180 -	155 -

表2-8 A6 学校あるいは仕事は
B6 学校あるいは仕事は

	調査A			調査B		
	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %
計	143 100.0	59 100.0	84 100.0	545 100.0	281 100.0	264 100.0
ほとんど休まない	91 74.6	36 69.2	55 78.6	154 83.7	77 81.9	77 85.6
ときどき休む	20 16.4	9 17.3	11 15.7	19 10.3	12 12.8	7 7.8
よく休む	11 9.0	7 13.5	4 5.7	11 6.0	5 5.3	6 6.7
不明	21 -	7 -	14 -	361 -	187 -	174 -

表2-9 A7 現在、お子さんと親や兄弟などの家族との間は
B7 現在、児童と親や兄弟などの家族との間は

	調査A			調査B		
	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %
計	143 100.0	59 100.0	84 100.0	545 100.0	281 100.0	264 100.0
特に困ったことはない	79 59.0	28 51.9	51 63.8	102 54.8	45 46.9	57 63.3
時々困ることがある	38 28.4	17 31.5	21 26.3	53 28.5	29 30.2	24 26.7
困ることがよくある	17 12.7	9 16.7	8 10.0	31 16.7	22 22.9	9 10.0
不明	9 -	5 -	4 -	359 -	185 -	174 -

表2-10 A8 現在のお子さんの生活や行動は
B8 現在の児童の生活や行動は

	調査A			調査B		
	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %	計 名 %	被虐待児 名 %	非被虐待児 名 %
計	143 100.0	59 100.0	84 100.0	545 100.0	281 100.0	264 100.0
特に心配なことはない	55 41.4	24 43.6	31 39.7	88 32.8	39 27.1	49 39.5
何とか大丈夫	50 37.6	18 32.7	32 41.0	113 42.2	66 45.8	47 37.9
何かと心配	28 21.1	13 23.6	15 19.2	67 25.0	39 27.1	28 22.6
不明	10 -	4 -	6 -	277 -	137 -	140 -

資料5 入所前リスクアセスメントと最終学歴

リスクアセスメント		16-18 歳(除く中学生)		19 歳以上					
		N	中卒率(%)	N	中卒率(%)	高卒率(%)	大学進学率(%)		
虐待	虐待の継続	問題なし群	5	20.0	6	33.3	16.7	0.0 *	
		やや問題有り群	13	15.4	9	0.0	11.1	11.1	
		問題有り群	42	16.7	53	11.3	18.9	26.4	
	虐待による入院施設歴	問題なし群	33	18.2	34	17.6 *	17.6	26.5	
		やや問題有り群	6	0.0	8	12.5	0.0	12.5	
		問題有り群	18	16.7	24	0.0	20.8	16.7	
	性的虐待	問題なし群	52	19.2	56	8.9	10.7	26.8	
		やや問題有り群	2	0.0	2	0.0	50.0	0.0	
		問題有り群	1	0.0	12	16.7	25.0	16.7	
関係機関からの情報		問題なし群	13	23.1	11	18.2	9.1	18.2	
		やや問題有り群	6	33.3	5	40.0	0.0	60.0	
		問題有り群	40	12.5	60	8.3	20.0	21.7	
児の問題	身体状態	問題なし群	33	15.2	41	9.8	19.5	22.0	
		やや問題有り群	6	16.7	6	16.7	16.7	16.7	
		問題有り群	20	25.0	25	8.0	8.0	24.0	
	精神的状態	問題なし群	9	0.0	5	20.0	40.0	0.0 *	
		やや問題有り群	13	23.1	16	12.5	12.5	12.5	
		問題有り群	42	19.0	58	10.3	13.8	31.0	
	日常的状態	問題なし群	17	17.6	26	11.5	19.2	23.1	
		やや問題有り群	19	21.1	17	17.6	5.9	23.5	
		問題有り群	26	15.4	29	3.4	20.7	24.1	
	問題行動	問題なし群	10	20.0	16	18.8	0.0 *	43.8	
		やや問題有り群	8	12.5	6	0.0	16.7	0.0	
		問題有り群	46	17.4	56	10.7	19.6	21.4	
	意思・気持ち	問題なし群	9	22.2	9	22.2	22.2	11.1	
		やや問題有り群	12	8.3	9	11.1	44.4	22.2	
		問題有り群	39	17.9	58	10.3	12.1	27.6	
	養育者の問題	精神的状態	問題なし群	22	18.2	33	9.1	15.2	6.1 *
			やや問題有り群	13	7.7	8	25.0	25.0	12.5
			問題有り群	21	14.3	25	8.0	16.0	52.0
性格的問題		問題なし群	4	25.0	3	33.3	33.3	33.3	
		やや問題有り群	11	9.1	14	0.0	28.6	0.0	
		問題有り群	44	18.2	53	13.2	13.2	30.2	
アルコール/薬物		問題なし群	32	12.5	40	7.5	17.5	20.0	
		やや問題有り群	9	22.2	2	0.0	0.0	0.0	

被虐待歴	問題有り群	9	0.0	20	20.0	10.0	40.0	
	問題なし群	8	0.0 *	10	0.0	20.0	20.0	
	やや問題有り群	2	0.0	4	25.0	25.0	25.0	
	問題有り群	20	20.0	17	11.8	17.6	29.4	
子感情／態度	問題なし群	19	10.5	15	20.0	0.0	26.7	
	やや問題有り群	9	11.1	12	0.0	33.3	8.3	
	問題有り群	28	21.4	27	14.8	11.1	25.9	
養育状況	虐待自覚なし	問題なし群	13	15.4	12	8.3	33.3	25.0
		やや問題有り群	11	18.2	16	0.0	6.3	25.0
		問題有り群	38	15.8	43	11.6	18.6	23.3
	養育意欲／能力	問題なし群	17	11.8	23	4.3	30.4	17.4
		やや問題有り群	15	20.0	13	30.8	15.4	15.4
		問題有り群	31	16.1	39	7.7	10.3	30.8
	養育知識	問題なし群	10	30.0	13	7.7	23.1	38.5
		やや問題有り群	11	18.2	10	10.0	30.0	20.0
		問題有り群	42	11.9	46	15.2	8.7	21.7
家族環境	社会的サポート	問題なし群	17	11.8	14	7.1	21.4	21.4
		やや問題有り群	18	27.8	11	9.1	18.2	27.3
		問題有り群	29	17.2	47	14.9	17.0	27.7
	夫婦問題	問題なし群	12	0.0 *	11	18.2	18.2	18.2
		やや問題有り群	6	0.0	8	0.0	12.5	37.5
		問題有り群	41	24.4	52	13.5	19.2	21.2
	経済問題	問題なし群	19	15.8	15	6.7	20.0	33.3
		やや問題有り群	8	25.0	9	11.1	11.1	11.1
		問題有り群	34	17.6	50	12.0	16.0	24.0
	生活環境	問題なし群	34	20.6	34	8.8	20.6	26.5
		やや問題有り群	9	33.3	11	18.2	9.1	18.2
		問題有り群	13	15.4	21	14.3	14.3	28.6
機関	協力態度なし	問題なし群	35	17.1	38	7.9	13.2	26.3
		やや問題有り群	14	21.4	20	10.0	30.0	20.0
		問題有り群	11	18.2	9	11.1	0.0	22.2
	援助効果なし	問題なし群	22	31.8	29	3.4	17.2	27.6
		やや問題有り群	23	8.7	22	13.6	13.6	22.7
		問題有り群	14	14.3	17	11.8	17.6	11.8
子を守る人なし	問題なし群	22	27.3	30	10.0	13.3	26.7	
	やや問題有り群	18	5.6	15	6.7	33.3	26.7	
	問題有り群	18	22.2	23	13.0	8.7	21.7	

資料6 入所前リスクアセスメントと現在の就労

リスクアセスメント			16-18 歳			19 歳以上		
			N	ニート率(%)	就職率(%)	N	ニート率(%)	就職率(%)
虐待	虐待の継続	問題なし群	6	16.7	16.7	5	20.0	60.0
		やや問題有り群	10	0.0	40.0	6	16.7	66.7
		問題有り群	39	10.3	23.1	52	9.6	61.5
	虐待による入院施設歴	問題なし群	29	13.8	17.2	28	7.1	60.7
		やや問題有り群	6	0.0	16.7	6	16.7	50.0
		問題有り群	16	6.3	37.5	24	12.5	62.5
	性的虐待	問題なし群	48	10.4	25.0	47	14.9 *	57.4
		やや問題有り群	2	0.0	0.0	1	0.0	0.0
		問題有り群	50	0.0	0.0	12	0.0	75.0
関係機関からの情報	問題なし群	12	8.3	8.3	12	16.7	83.3	
	やや問題有り群	5	0.0	40.0	6	16.7	16.7	
	問題有り群	36	11.1	25.0	50	10.0	62.0	
児の問題	身体状態	問題なし群	26	11.5	19.2	34	5.9	67.6
		やや問題有り群	7	0.0	28.6	7	57.1	28.6
		問題有り群	20	10.0	25.0	21	4.8	57.1
	精神的状態	問題なし群	9	0.0	22.2	4	25.0	75.0
		やや問題有り群	14	7.1	35.7	15	13.3	60.0
		問題有り群	35	8.6	22.9	50	10.0	60.0
	日常的状态	問題なし群	15	6.7	26.7	25	8.0	60.0
		やや問題有り群	15	6.7	20.0	12	16.7	50.0
		問題有り群	26	7.7	26.9	26	7.7	65.4
	問題行動	問題なし群	11	18.2	18.2	14	14.3	35.7
		やや問題有り群	5	0.0	20.0	5	20.0	80.0
		問題有り群	42	4.8	28.6	49	10.2	67.3
	意思・気持ち	問題なし群	10	0.0	10.0	6	16.7	66.7
		やや問題有り群	16	12.5	25.0	12	25.0	41.7
		問題有り群	30	6.7	30.0	49	8.2	65.3
養育者の問題	精神的状態	問題なし群	19	0.0	31.6	30	13.3	73.3
		やや問題有り群	9	0.0	22.2	5	0.0	80.0
		問題有り群	21	14.3	9.5	21	9.5	47.6
	性格的問題	問題なし群	4	0.0 *	50.0	2	0.0	50.0
		やや問題有り群	10	0.0	10.0	10	10.0	80.0
		問題有り群	38	10.5	18.4	48	10.4	58.3
	アルコール／薬物	問題なし群	27	7.4	22.2	35	8.6	62.9
		やや問題有り群	7	28.6	0.0	1	100.0	0.0
		問題有り群	9	11.1	11.1	20	5.0	65.0
	被虐待児歴	問題なし群	8	12.5	12.5	10	20.0	60.0
		やや問題有り群	1	0.0	0.0	2	50.0	50.0
		問題有り群	14	0.0	14.3	16	6.3	56.3
	子感情／態度	問題なし群	17	0.0 *	29.4	15	6.7	73.3
		やや問題有り群	7	14.3	0.0	7	28.6	57.1
		問題有り群	24	16.7	12.5	23	4.3	69.6

養育状況	虐待自覚なし	問題なし群	12	0.0 *	25.0	12	8.3	66.7
		やや問題有り群	7	0.0	28.6	11	18.2	54.5
		問題有り群	36	13.9	19.4	38	10.5	63.2
	養育意欲/能力	問題なし群	15	13.3	13.3	20	10.0	60.0
		やや問題有り群	14	0.0	50.0	10	20.0	60.0
		問題有り群	29	10.3	17.2	35	11.4	60.0
	養育知識	問題なし群	10	20.0	10.0	13	15.4	61.5
		やや問題有り群	6	0.0	50.0	9	0.0	77.8
		問題有り群	40	7.5	20.0	38	15.8	52.6
家族環境	社会的サポート	問題なし群	16	0.0	31.3	9	11.1	66.7
		やや問題有り群	13	15.4	7.7	12	16.7	50.0
		問題有り群	27	11.1	25.9	44	9.1	65.9
	夫婦問題	問題なし群	7	14.3	14.3	8	12.5	50.0
		やや問題有り群	6	0.0	16.7	4	0.0	100.0
		問題有り群	40	10.0	27.5	51	13.7	60.8
	経済問題	問題なし群	15	13.3	6.7 *	14	7.1	50.0 *
		やや問題有り群	9	0.0	22.2	8	37.5	37.5
		問題有り群	30	6.7	30.0	41	9.8	75.6
	生活環境	問題なし群	28	10.7	21.4	30	10.0	63.3
		やや問題有り群	10	0.0	30.0	8	12.5	62.5
		問題有り群	13	7.7	38.5	20	15.0	55.0
機関	協力態度なし	問題なし群	33	6.1	24.2	31	12.9	61.3
		やや問題有り群	10	10.0	10.0	16	12.5	56.3
		問題有り群	10	20.0	30.0	10	10.0	60.0
	援助効果なし	問題なし群	20	15.0	20.0	26	11.5	65.4
		やや問題有り群	19	0.0	26.3	18	11.1	50.0
		問題有り群	14	14.3	28.6	13	15.4	61.5
子を守る人なし	問題なし群	19	10.5	26.3	21	14.3	57.1	
	やや問題有り群	16	0.0	6.3	12	16.7	58.3	
	問題有り群	17	17.6	41.2	24	4.2	62.5	

平成18年度研究報告書

児童虐待における援助目標と援助の評価に関する研究

—情緒障害児短期治療施設におけるアフターフォローと
退所後の児童の状況に関する研究—

平成19年 9 月30日発行

発 行 社会福祉法人 横浜博萌会
子どもの虹情報研修センター
(日本虐待・思春期問題情報研修センター)
編 集 子どもの虹情報研修センター
〒245-0062 横浜市戸塚区汲沢町983番地
TEL. 045-871-8011 FAX. 045-871-8091
mail : info@crc-japan.net
URL : <http://www.crc-japan.net>

編 集 研究代表者 滝川 一廣
共同研究者 四方 燿子
高田 治
谷村 雅子
大熊加奈子
大塚 齊
田附あえか

印 刷 (株)ガリバー TEL. 045-510-1341(代)